

東海道ウオーク

2009 年 8 月～2011 年 11 月

第 2 版

三浦良&美奈子



2011 年 12 月 9 日

目 次

1	東海道ウオーク事始め	(日本橋)	2009 年 8 月 10 日
2	西郷と勝の会見地	(三田)	2009 年 8 月 10 日
3	英公使館になった東禅寺	(高輪)	2009 年 8 月 10 日
4	「幕末太陽伝」	(品川)	2009 年 6 月 10 日
5	再開、東海道ウオーク	(川崎)	2011 年 1 月 9 日
6	生麦事件が日本の歴史を変えた	(生麦)	2011 年 1 月 9 日
7	神奈川問題	(横浜)	2011 年 1 月 9 日
8	ごんたさか 権田坂	(保土ヶ谷)	2011 年 1 月 10 日
9	不動坂の鎌倉ハム	(戸塚)	2011 年 1 月 10 日
10	ゆぎょうじ 遊行寺	(藤沢)	2011 年 1 月 15 日
11	なんこ 南胡の左富士	(茅ヶ崎)	2011 年 2 月 6 日
12	相模川と川の渡し	(平塚)	2011 年 2 月 6 日
13	松並木	(大磯)	2011 年 2 月 6 日
14	エリザベス・サンダースホーム	(大磯)	2011 年 2 月 6 日
15	ガラスのうさぎ	(二宮)	2011 年 2 月 11 日
16	代表的日本人・二宮尊徳	(小田原)	2011 年 2 月 11 日
17	箱根東坂	(箱根)	2011 年 2 月 19 日
18	箱根山戦争	(箱根)	2011 年 2 月 27 日
19	箱根西坂	(箱根)	2011 年 2 月 27 日
20	越年アユ	(三島)	2011 年 3 月 5 日
21	はくいん ぼんじ 白隠禅師	(沼津)	2011 年 3 月 5 日
22	富士登山	(吉原)	2011 年 4 月 3 日
23	富士川舟運	(富士)	2011 年 4 月 9 日
24	東海道を大切にする街	(蒲原)	2011 年 4 月 9 日
25	きつたとうげ 薩埵峠	(由井)	2011 年 4 月 17 日
26	せいけんじ 清見寺	(興津)	2011 年 4 月 17 日
27	清水次郎長	(清水)	2011 年 4 月 24 日
28	江戸城を去った徳川家	(静岡)	2011 年 4 月 29 日
29	宇津の谷峠	(丸子)	2011 年 4 月 29 日
30	楽しい屋号	(岡部)	2011 年 5 月 1 日
31	大井川の川越遺跡	(島田)	2011 年 5 月 3 日
32	徳川家臣団と士族授産	(金谷)	2011 年 5 月 3 日
33	中山茶	(日坂)	2011 年 5 月 3 日

34	イギリス外交官襲撃事件	(掛川)	2011年5月6日
35	東海道中膝栗毛を読む (1)	(袋井)	2011年5月8日
36	アユ解禁	(磐田)	2011年5月14日
37	東海道中膝栗毛を読む (2)	(天竜川)	2011年5月14日
38	東海道中膝栗毛を読む (3)	(浜松)	2011年5月15日
39	新居関所	(新居)	2011年6月4日
40	三河弁	(豊橋)	2011年6月11日
41	宿駅伝馬制	(赤坂)	2011年6月26日
42	大橋屋	(赤坂)	2011年6月25日
43	三河武士	(岡崎)	2011年7月2日
44	三河万歳	(知立)	2011年7月3日
45	絞りの有松	(鳴海)	2011年7月9日
46	宮の渡し	(宮)	2011年7月10日
47	長良川河口堰	(桑名)	2011年9月30日
48	時雨蛤	(桑名)	2011年9月30日
49	^{ひなが} 日永の追分	(四日市)	2011年10月1日
50	シャープ亀山工場	(亀山)	2011年10月1日
51	時間が止まったまま 往時の姿を保つ関宿	(関)	2011年10月8日
52	鈴鹿峠	(鈴鹿峠)	2011年10月8日
53	^{たるみさいおうとんぐうあと} 垂水斎王頓宮跡	(土山)	2011年10月8日
54	田村神宮	(土山)	2011年10月8日
55	水口の干びよう	(水口)	2011年10月9日
56	^{しがらきぐう} 紫香楽宮	(水口)	2011年10月21日
57	三上山	(石部)	2011年10月21日
58	天井川 (旧草津川)	(草津)	2011年10月22日
59	瀬田の唐橋	(大津)	2011年10月22日
60	大津京	(大津)	2011年10月22日
61	逢坂の関	(大津)	2011年11月20日
62	花咲く都	(京都)	2011年11月20日
63	行程表		

表紙の写真は天龍寺（京都・嵐山）の玄関の衝立の「達磨図」（前管長・平田精耕氏）。玄関口の衝立は、単に目隠し用のパーテーションでなく、訪問客が最初に目にする調度品なので、それ自身に「おもてなし」にふさわしい美しさが求められている。この絵は達磨宗の天龍寺の顔のようなもので、見るたびにまた禅寺へきたなと緊張させられる。

1 日本橋	東海道ウオーク事始め	2009 年 8 月 10 日(月)
-------	------------	--------------------

突然だったが、「東海道ウオーク」を思い立った。リタイアしたので、その記念になることをしたかった。この日は、日本橋から品川まで歩いた。

東海道を歩いてみよう。車や電車でなく東海道を自分で歩いてみよう。今まで見過ごしてきた事も再発見するかもしれない。だから、寄り道もたくさんしてみよう。人の意見でなく、自分の体験で物事を見直してみるのもいい。いつ都にゴールできるかは決めないで、妻と2人で歩くことにした。そして道中のあれこれをブログに書いてみようとも考えた。

右下の写真は道路原標で道路の起点を示す標識である。国道を歩くと歩車道の境目に〇〇kmと書かれた表示がある。それが里程標で、五街道は日本橋の真ん中に埋められたこの道路原標が起点である。ただ近年の高速道路は東名が環八入口、中央道が高井戸ICという具合に路線ごとに置かれるようになっている。



2 三田	西郷と勝の会見地	2009 年 8 月 10 日
------	----------	-----------------

東海道が日比谷通りと交差する「芝 5 丁目」交差点を過ぎると、左に三菱自動車本社ビルがある。その足元に「西郷・勝会見の地碑」がある。このあたり一帯は薩摩藩の土地だったようで、NEC の敷地内にも薩摩藩跡を示す碑がある。



1868 年 1 月 27 日（慶応 4 年 1 月 3 日）に始まった鳥羽伏見の戦いで優勢に立った薩長軍に朝廷が官軍として錦旗を与えると、幕府軍は賊軍となり離反者も相次ぎ、慶喜は海路江戸へ遁走した。東海道を東征してきた官軍は江戸攻撃に先立ち、4 月 5, 6 日（3 月 13, 14 日）に西郷・勝がここで会見し、江戸城明渡しと慶喜の水戸退去を骨子とする合意に至り無血開城となった。しかし、争いはまだ序の口で、その後 1 年以上にわたり幕府と新政府の争いは戊辰戦争^{ぼしんせんそう}として越後、東北地域を舞台に続けられた。

江戸開城は江戸の住民を戦火に巻き込まなかったことが最大の成果だった。し

かし、幕府が天皇を頂点とする明治新政権にいち早く完全降伏したことを意味し、江戸の都市基盤を無傷で新政権へ渡す意義をもった。江戸開城には多彩な評価があり、勝海舟は無血開城の幕府側の責任者だったので、勝の評価もまた激しい毀譽褒貶にさらされてきた。

福沢諭吉は 1891 年（明治 24 年）に「**瘦せ我慢の説**」を書き、勝と榎本の維新後の出处進退を批判した。強弱がはっきりしている国際社会でも小国は勝算がなくても千辛万苦、力の限りを尽くす「瘦せ我慢」をして国の榮譽を保っている。今後の日本にも「瘦せ我慢」精神は重要である。しかるに、勝は無血開城で瘦せ我慢を旨とする武士の気風を損ない、外国からも前例がないと冷笑された。そのうえに、あれほどの事件を起こした政治家が、維新後は敵だった新政府で高位高官を得ている。人民を欺き、武士の士気を弱めたのは勝の責任でその後は地位も財産も捨てて身を隠すなら救いもあるが、そうならないのは国民の不幸である、と述べている。

これに対する勝海舟の回答もいい。「**行蔵は我に存す、毀譽は他人の主張、我にあずからず、我に関せずと存じ候。各人へお示し御座候とも毛頭依存これなく候**」



札の辻から東京タワーを見る。慶応大学三田校舎の前から先は国道一号線となっている。
私自身もよく利用したが、昔は都電が走っていた。

3 高輪	英公使館になった東禅寺 ^{とうぜんじ}	2009 年 8 月 10 日
------	------------------------------	-----------------

泉岳寺交差点を過ぎて、高輪門跡の先の交差点を右に曲がると、約 300m 位続くきれいな一本道があり、その突当りに「東禅寺」がある。



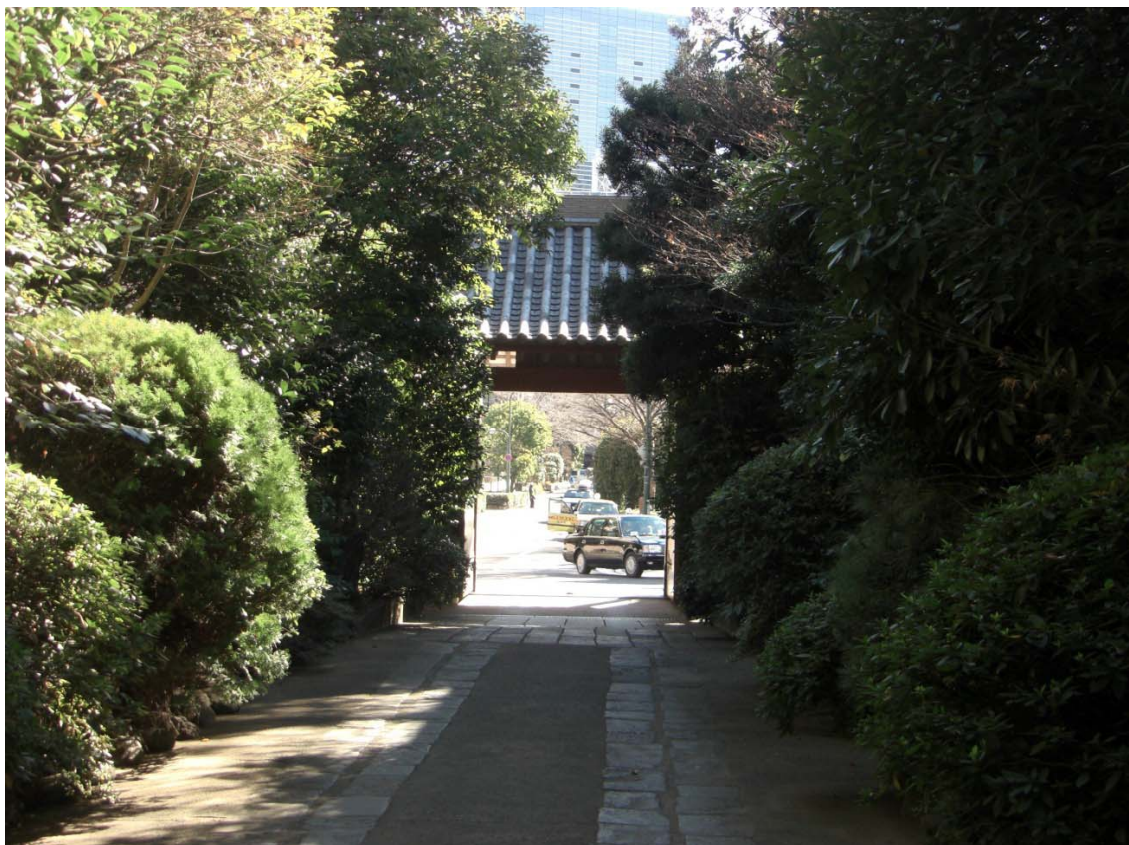
初代英公使・オールコックはサンプソン号で、1859 年 6 月 26 日品川沖へ到着した。6 月 29 日浜離宮に上陸して、公使館候補の視察をし、高輪の東禅寺を一目見て気に入り、その日のうちに英公使館に決定した。江戸中心部から離れているが 3 万坪に広がる荘重な構えの寺で部屋も充分ある。東海道の左側はすぐ江戸湾で海上の船との連絡もたやすい、というのが選んだ理由だった。引越しの後、7 月 6 日には国旗も掲揚されて業務が開始された。

引っ越しが終わって、次に開港場視察へ行った。驚いたのは条約上の開港地は神奈川だが、現地では横浜に整備中だったことである。「神奈川問題」である。聞けば、横浜も神奈川の一部といい、ハリスも承諾済みで、浄滝寺に領事館も

用意したという。オールコックとハリスは何度か抗議するが、計画した安部老中や岩瀬忠震ら幕府側は外国側の反対も予想し最終的には横浜を飲ませるつもりで工事を続け、やがて外国側は既成事実として認めざるを得なかった。

1861年5月28日水戸藩の浪士14名が公使館を襲撃した。第1次東禅寺襲撃事件で、書記官オリファントと長崎領事モリソンが負傷、公使自身は短銃で防戦して難を逃れた。オールコックは改めて、日本人の外国人排外運動の根強さと日本側警備兵の弱体さを知った。犯人処分のうえ、イギリス水兵の公使館駐屯、日本側警備兵の強化、1万ドルの賠償金で解決した。

その1年後の1862年5月29日、警備兵の一人が代理公使ニールを襲撃した。水兵2名が死傷し、犯人も自害した。第2次襲撃事件で、英側警備兵が増強された。賠償金交渉中に8月生麦事件が発生し、生麦事件の解決時に、1万ドルの賠償金が支払われた。



4 品川	幕末太陽伝	2009 年 8 月 10 日
------	-------	-----------------

品川駅を過ぎると八ツ山橋に出る。直進が第一京浜、左が八ツ山通り、その間の道が東海道で、品川宿の入口になる。踏切を渡り、だらだら坂を下ると数軒先に「土蔵相模跡」(大妓楼の相模屋の跡地)の碑がある。品川はもともと海に面した漁師町で、どの路地も左へ入ると海へ出た。

今でも土蔵相模の先の路地を入ると、いきなり品川浦の舟溜りへ出る。舟溜りの水路の突き当りに洲崎弁天(利田神社)^{かがた}がある。漁師の守護神である。神社に接する細長い公園には昔ここの漁師が鯨をとった記念の「鯨塚」もある。さらに神社の海側の台場小学校の脇には、品川台場跡があり、白い灯台のレプリカが立っている。ペリーが江戸沖へ来た時、伊豆蓑山の代官・江川太郎左衛門の提案で黒船を迎え撃つために作った人口島の砲台である。この台場は桜の名所だった御殿山を崩した土砂で作られた。

品川宿は東海道第一番目の宿場で細長い。この八ツ山口から目黒川までが徒歩新宿と北品川宿で、目黒川から鈴ヶ森までが南品川宿。この間3.8kmが幅3間(4.5m)の東海道が残っている。そして今なお、生活道路としてそのまま使われている。とても珍しいことだ。

この品川はただの漁師町でなく、遊里としても有名だった。海に面した景勝の宿場町だったので、早くから料亭や遊郭が生まれた。「北の吉原、南の品川」と呼ばれるほどだった。その品川は北品川を指す。遊郭を舞台にした「居残り佐平次」や「品川心中」の落語もある。私は以前から通勤電車でテープに入れた古今亭志ん朝や上方の桂枝雀の落語を聞いていた。だから、志ん朝の話から品川のにぎやかさはよく知っていた。



「幕末太陽伝」（川島雄三監督、S33年松竹）という映画がある。古いが先日デジタルリマスター版ができたというので、早速見た。幕末の文久2年、品川の大店・土蔵相模屋を舞台にして、落語の「居残り佐平次」、「品川心中」、「お見立て」をアレンジした喜劇映画である。

労咳（肺結核）病みの佐平次（フランキー堺）が、お金はないが転地療養するために相模屋で「居残り」をする。布団部屋を根城にして、佐平次は芸達者でよく気が付き愛想もいいという特技を生かして次第に馴染みもできる。この宿にはお金が払えず「居続け」の尊王攘夷の志士・高杉晋作（石原裕次郎）もいた。彼らは攘夷を目指して御殿山で建設中のイギリス大使館焼き討ちを計画している。さらに板頭のお染（左幸子）は祭りの前でも着物も買えず、死のうとしている。心中の相手に貸本屋のあばたの金蔵（小沢昭一）である。相模屋の前の栈橋で先に金蔵が突き落とされるが、番町の旦那がお金を持ってきたと聞いて、お染は心中をやめてしまう。飛び込んだ金蔵は遠浅の海だったので助かる。イギリス大使館焼き討ちも成功する。次第に、佐平次も「居残り」をやめようとする。いよいよ辞める時に、お染の旦那が来るが、お染が佐平次に断ってくれるよう頼む。頼まれた佐平次がお染は死んだことにすると、旦那がその墓へ連れて行けという。寺へ行くがその墓が決まらない。旦那が怒り、佐平次は墓から逃げ出す。

この映画は、喜劇仕立てだが、見る人を元気にさせるのが魅力である。俳優もフランキー堺や小沢昭一、石原裕次郎、左幸子、南田洋子など、個性派揃いで、楽しい。ストーリーも落語に沿った筋立てで、落語ファンにはこたえられない面白さがある。加えて、当時の世相や街の様子をしっかりと見せてくれる。

（注）この稿は2012年11月に改定した。

右のポスターは2011年12月デジタル

リメイク版の公開時のものである。



5 川崎	再開、東海道ウオーク	2011 年 1 月 9 日
------	------------	----------------

再開のご挨拶

2009 年 8 月 10 日、我々ドン・キホーテとサンチョ・パンサは東海道完全踏破を旗印に意気揚々と日本橋を出発した。

ところが、都心から品川を経て多摩川を越して川崎に入ったところで、同行者の妻サンチョ・パンサが膝を痛めた。開始早々のことだったが、残念ながら、ウオークはやむなく中断せざるを得なかった。

しかし、約 1 年半後、幸いにもその膝が回復したので、中断していたウオークを再開することにした。

2011 年 1 月 9 日

ドン・キホーテ

再現された旧東海道



川崎もこの砂子通り（「いさご」と読む）は街道の名残が残されている。しかし、次の日進町、八丁畷まで来ると、ごくありふれた道に戻る。その先の鶴見を経て神奈川まで来ると、再び、旧東海道が再現された道になる。

名残が残された区間が短くてかつ貧弱だ。全部の区間とは言わないが一定の区間をある程度の規模で再現すれば 150 年後の今日でも気軽に歩いて楽しむことができるはずだ。若いころに道路行政に携わり、「楽しく歩ける道づくり」を実践してきた経験からみて、こうした歴史的な遺跡はもっと積極的に保存・活用できるようにしておくべきだったと思う。

6 生麦	生麦事件が日本の歴史を変えた	2011 年 1 月 9 日
------	----------------	----------------

鶴見駅を抜け、第一国道を横断して、JR 鶴見線ガードをくぐると生麦魚河岸通りが始まる。鶴見川に接して魚貝類がたくさん捕れたことから魚河岸通りとよばれて、現在も毎朝早くから魚や貝が商われている。その途中に「生麦事件発生現場の碑」がある。



生麦事件とは、1862 年 9 月 14 日(文久 2 年 8 月 21 日)、薩摩藩主・島津久光が江戸から帰国途中に、この生麦村で行列に乗り入れた上海の英国商人 C・リチャードソンら 4 名を無礼討ちで殺傷した事件である。リチャードソンはここでとどめを刺され、傷を負ったボロデーロ夫人、クラーク、マーシャルは馬に乗ったまま米国領事館(本覚寺)、英国領事館(浄龍寺)へ逃げ帰った。薩摩藩はそのまま行列を進めて、保土ヶ谷宿へ入った。横浜在住の英国人は激昂し報復を主張したが、英代理公使ニール氏がこれを収めて、後日、徳川幕府へ謝罪と賠償金 10 万ポンド、薩摩藩へ犯人処罰と賠償金 2. 5 万ポンドを要求。

幕府は翌年 5 月支払ったが、薩摩藩は支払い拒絶したため、7 月に薩英戦争が発生した。9 月講和会議で薩摩藩は幕府から借金の上これを支払った。

この事件は、第 1 に幕府が薩摩藩を統制できないほど弱体化していることを示した。第 2 に現状では西洋列強に勝てないことがはっきりしそれまでの外国人排除思想を「小攘夷」とし、開国で富国強兵を図って西洋列強に伍するようにする「大攘夷」論が急速に広まった。第 3 に薩摩藩は戦争を機に英国へ親近感を持つようになり、英国もまた薩長をひそかに支援することに転換した。これらから見ると、この事件は日本の歴史を大きく変えた事件だったことが判る。

7 横浜	神奈川問題	2011 年 1 月 9 日
------	-------	----------------

青木橋を渡ると丘の上にアメリカ領事館跡の本覚寺がある。ここから狭い旧道へ入り、東横線の廃線敷を過ぎると、台町の坂になる。台町は、昔は袖ヶ浦と呼ばれた海に面した高台で、野毛山や本牧岬を望む景勝地だった。だから、神奈川宿は、旅籠や茶屋が並んで人馬の往来が絶えることがないほど栄えていた。



割烹 田中屋

神奈川宿は 5 カ国条約上はここが開港地のはずだったが、幕府は対岸の横浜を開港地としたので、昔の街並みが残された。しかし、開港に伴って尊王攘夷論が広まり、その排外主義により開国論者の多くは暗殺対象者になったので、ゆっくりみなど見物などした人はいなかっただろう。それでも、坂の途中の割烹「田中屋」には坂本竜馬のつれあいだったおりょうさんもある時期働いていたというのだから、港を遠くから眺める場所だったに違いない。

英公使オールコックも米公使ハリスも、現地へ来て横浜村で開港場建設を進めている様子を見て、幕府が意図的に出島を作ろうとしていると大いに驚いた。オールコックは、条約相手国に相談なしに開港地が変更されたこと、開港地が出島のような自由な交易、自由な人々の往来が保証できないとして抗議した。これに対して、幕府は神奈川が広域名称で同じ湾内にある横浜もその一部である、神奈川沖が遠浅で港に適さない、攘夷派からの外国人保護上の不適切さを挙げて協力を求めた。これに対して5カ国側は手続き面の不備を攻撃した。

しかし幕府の横浜開港は周到に練られた戦略的事業だった。条約交渉のトップの老中・堀田正睦は岩瀬忠震の横浜開港論に沿って交渉を進めていた。その基本的考え方は、政治中枢の江戸と経済中枢の大阪は開港しない。開港場は両都市から適度に離れた場所に、その「外港」として「出島」の形態で開港する。輸出品、輸入品とも江戸へ集めてから全国へ流通させる物流システムを形成して、利権を江戸へ集中させて幕府権力の強化を図る、というものであった。

そうした国家戦略は隠されたまま、幕府は各国領事に、攘夷派からの警備、居留地整備、良港な港などの理由で横浜を開港場にせざるを得ないと説得を始めた。同時に、幕府はぬかりなく、日本側の商人を地租免除して希望者に加えて幕府が指定した両替商三井など数百軒を横浜へ集めた。幕府は、外国側が日本の実態を理解できるようになれば、条約違反の反発も次第に収まるだろうとみていた。それだけで幕府は静観していたわけではなかった。外国側の反発を和らげるため、5カ国の領事館はすべて神奈川の寺をあてた。また、横浜を管轄する奉行所を神奈川奉行所、横浜の税関を神奈川運上所と呼ぶなどの工夫もした。

こうして、各国領事の反対にもかかわらず、外国商人たちは続々と横浜居留地へ集まるようになり、取引も急激に増えていった。その結果、在留外国人が横浜で貿易活動に従事し、彼らを保護、監督する領事が対岸の神奈川に暮らすといった不便な事態が生じてきた。さらに新たに外国商人が増加すると、横浜居留地が次第に手狭になり、地割を巡って各国領事が争う事態まで起き始めた。

開港後約1年で神奈川問題は、幕府の思惑通り、横浜を居留地とすることでなし崩し的に決着していった。この一連の事態について、オールコックは、幕府はあらゆる面で準備を整えており、その熱心さと用意周到さはいかに疑い深い者でも納得させられるほどで、日本人の外交に関する最初の授業だったと述べている。

8 保土ヶ谷	ごんたさか 権田坂	2011 年 1 月 10 日
--------	--------------	-----------------

保土ヶ谷交差点から約 2kmで権太坂入口に着く。権太坂は言わずと知れた箱根マラソン「花の 2 区」の最大の難所である。それでも今の権太坂は切通しの中をゆっくり登っていく。

昔の東海道はいきなり強烈な登り坂になる。権太坂入口は新旧両方とも同じで、今の権太坂は保土ヶ谷バイパス(橋梁)の下を抜けていくが、昔の権太坂はバイパス(橋梁)の上にもう一つ渡した橋梁をいく。だから、今でも MM21 地区のランドマークタワーがよく見えるが、権太坂の由来板にはここから東京湾とその先の千葉がよく見えたと言われている。



日米修好通商条約は 1858 年 7 月 29 日(安政 5 年 6 月 19 日)。その後英仏など 4 カ国とも条約を結んだが、開港場は 9 月になって横浜村と決定した。

1859 年 7 月 1 日(安政 6 年 6 月 2 日)の開港までの 1 年以内に波止場建設、奉行所や運上所建設、横浜道建設、街の建設、商人移住など山のような仕事があった。工事が始まったのは 1859 年 1 月頃で、開港までの実際の工期は約 3 カ月程度だったという。

最も難航したのは東海道と横浜村を結ぶ横浜道の建設で、これを担当したのが保土ヶ谷宿の本陣を務めた荻部清兵衛だった。地ならしは磯子村の農民、堤磯右衛門が行いつつ、荻部が道路整備を進めて間に合わせたといわれている。その荻部本陣跡が保土ヶ谷交差点に残っている。

9 戸塚	不動坂の鎌倉ハム	2011 年 1 月 10 日
------	----------	-----------------

東海道は不動坂で左へ折れて戸塚宿へ至る。戸塚駅周辺では難産だった再開発が真っ盛りである。東口はすでに 1990 年に完了済みだが、西口は 2013 年完了予定だがまだまだ時間がかかりそうに見える。その西口再開発の目玉の一つが「戸塚大踏切」の立体交差化である。戸塚大踏切は旧国道一号線と東海道線、横須賀線の踏切で、長い間、開かずの踏切で大勢が苦勞させられた。立体交差化工事は 2014 年度までの予定と聞いた。完成すれば旧道と一緒に東海道も鉄道をアンダーパスすることになる。

不動坂から直進する現一号線は大坂上で旧道と合流して原宿方面へ向かう。この不動坂～大坂上は別名「戸塚道路」または「ワンマン道路」と呼ばれて、箱根マラソンもこのワンマン道路がコースの一部になっている。昭和 28 年、当時の吉田首相のお声がかかりで開かずの踏切といわれる戸塚駅前の大踏切を避けるため、このバイパス道路が建設された経緯もあり、「ワンマン宰相」だった吉田首相の名をとってこのように呼ばれた。



不動坂から約 300m 下った右側に、赤レンガ造の大きな倉庫が現われる。地元の名家でもある斉藤家である。この斉藤家は「鎌倉ハム」の創設者の一人で、今でも名古屋に本社を構えてハムやソーセージの製造販売をしている。そこで「鎌

倉ハム」について説明する。

明治 10 年にイギリス人 W・カーテイス（新橋横浜間の鉄道敷設の指導に当たった鉄道技師）が東海道に面したここ柏尾村で居留地の外国人相手に「白馬亭ホテル」を開業した。同時に、このホテル敷地内に牛馬、豚などを飼育し、ハム、ソーセージ、牛乳、バターなどを製造販売した。当初この製品はホテルと居留地だけで販売したので、カーテイスは日本人の敷地内立ち入りを禁じ、製法も日本人には教えなかった。しかし、カーテイスはこの村の娘・おかねを日本人妻にし、明治 17 年の工場火災で近所の日本人の消火活動に感激したことなどから、次第にこれまでの日本人排斥感が薄らぎ、地元の農家・益田直蔵と地元の名士・斉藤万平の二氏にハムの製法を教えた。

以降、鎌倉ハムは斉藤系と益田系（のちの石井商会）の二つの流れに沿って発展した。益田は「鎌倉ハム」と名付けて製造したが、昭和 2 年石井商会の石井嘉吉と共同経営で受け継いだ。また、斉藤は、関東大震災を経て名古屋へ転出して規模を拡大した。この不動坂の鎌倉ハムは斉藤系で、ここがまた鎌倉ハム発祥の地である。

「鎌倉ハム」はブランド名だが、長い歴史があるため、複数の事業者が製造販売していて特定企業の銘柄でない。また、ここが昔は鎌倉郡柏尾村だったためその地名を冠して「鎌倉ハム」と呼ばれているが、今は横浜市戸塚区上柏尾町であるために、鎌倉市域の発祥ではないのに「鎌倉」という名を冠している特徴がある。なお、赤レンガ倉庫は明治 20 年代に建てられて、冷蔵庫として使われた。



10 藤沢	ゆぎょうじ 遊行寺	2011 年 1 月 15 日
-------	--------------	-----------------

11 時過ぎに遊行寺到着。寒い日で境内は閑散としていた。この後、単調な道だったが、茅ヶ崎まで歩いた。藤沢は、鎌倉時代末期ころから遊行寺の門前町として発展し、江戸時代になるとすぐ東海道の宿駅に指定された。安藤広重の東海道 53 次の藤沢では遊行寺が描かれている。



遊行寺へ行くと、広重の絵はずいぶん実際と違っていることが分かる。絵と実物と比べると、入口の黒門が不自然で形も違う、参道に高い階段はない、のである。以前から広重は実際に東海道を歩かないまま絵を描いたらしい、と言われている。そうかもしれない。しかし見ていないとか実際と違うとかいっても、それが絵の価値を下げることは少しもない。行ったことがない場所を描くために他人の話、旅行記、絵を参考にするのは当然だし、元絵があってデフォルメがあって当然だからである。要はそうであっても独自の魅力があるか、心を打つものがあるかの問題だろうと思われる。

しかし近年、広重の 53 次は司馬江漢の元絵の盗作という説が広まっている。江漢「東海道 53 次画帳」をみると、広重は 53 枚中 50 枚が画帳を元絵にしていると伊豆高原美術館の對中如雲氏が発表し、マスコミが面白がって取り上げたためである。

上図の左が広重の藤沢、右が江漢の藤沢である。私は元絵があっても広重の絵は独自の魅力がある。絵画でも「本歌取り」は当然ある技法だし、そのために広重の価値は何ら揺るがないものと考えている。それよりも前に、江漢の画帳が江戸期の本物かどうかをまず検証するほうが先だろう。困ったことは、その美術館が閉館してしまっているし、その絵も売り払ったというのである。盗作論争をするなら、もう少し徹底的に行わないとすべてが生煮え状態になってしまって、かえって混乱を深めるだけになることをこの盗作問題は残している。



11 茅ヶ崎	なんこ 南湖の左富士	2011 年 2 月 6 日
--------	---------------	----------------

今日は茅ヶ崎からスタート。東海道が一号線とダブる区間だったので、排ガス対策で マスクをつけて歩いています。当初は大磯まで歩く予定でしたが、大磯で歴史のありそうなお蕎麦屋さんで早めの昼食をとると、連れのサンチョ・パンサが体調はともいいというので、ついつい二宮まで足を延ばしました。次第に筋肉痛もはじまって少々つらい道中となりました。



茅ヶ崎から西へ約 3 k m 行くと、それまで西へ向かった道路が右に大きくカーブする。そのカーブが再び左へ曲がる場所に鳥井戸橋があり、そのたもとに

「^{なんこ}南湖の左富士」の碑がある。東海道を西へ下る人には富士山はおおむね右側に見えるのだが、この南湖（茅ヶ崎）と吉原（富士の宮）の 2 個所で左側に見えるといわれてきたところである。着いた時は、あいにくのうす曇りで富士山の姿は見えなかった。

ところで、南湖は「立場茶屋」である。宿場と宿場の間の「間の村」（あいのむら）のいくつかが「立場」（たてば）と呼ばれた。立場では、馬の継ぎ立て、人足や駕籠かきの休憩が行われた。立場のうち、権太坂を上りきった境木、相模川に接する南湖、酒匂川に接する梅沢などで、次第に茶を給仕する茶立女（ちゃたておんな）を置いて営業するお茶屋になったものが「立場茶屋」とよばれたようだ。後にみる十返舎一句の「東海道中膝栗毛」では女性をからかったり、川渡し人足とトラブルを起こした場所であった。今では往時のにぎやかな街はないが、碑を通じて華やかだった昔を偲んでみるのもいい。

12 平塚	相模川と川の渡し	2011 年 2 月 6 日
-------	----------	----------------

相模川には普段からアユ釣りによく来る。毎年 6 月から 10 月半ばまでがアユ釣りの解禁時期で、釣り場はここよりもずっと上流の高田橋や小倉橋あたりになる。この橋は「馬入橋」という。この川の名前も馬入川という人もいる。土地の人に聞いたら、源流部は「桂川」、中流部は「相模川」、下流部は「馬入川」というのだそうである。



川は今、どの川もそうだが、水がない。発電、上水道や農業用水などのために、水はみんなダムで止められて、途中で抜かれている。そのダムが少しずつ流す水だけが普段川を流れているにすぎない。水が少ないので、普段から川が怖いと思わない人が急増している。それが集中豪雨や鉄砲水で被害を起こす。

しかし、少し前まではそんなことはなかった。川はいつもとうとうと水が流れ、嵐のときは濁流や洪水となって人に大被害を及ぼすものだ。もっと前の江戸時代には、少しばかりの雨でも始終氾濫をおこして暴れていたのだろう。どちらがいいとは言いがたいが、川には水があって当然だろう。

幕府は大河川に架橋するのを禁止した。橋をかけさせなかったのは、関所のように自由通行を制限する政治的理由と兩岸の宿駅の人々の生活を保護する経済的理由があったらしい。

いずれにせよ、橋がない限り、川を渡るには、船渡ししか徒歩渡しになる。渡し場は道中奉行が所管して、定船場が作られて、その方法や料金が決められてい

た。例えば神奈川県内では、多摩川と相模川は船渡し、酒匂川は徒歩渡し、馬渡し、蓮台渡しと決められていたらしい。

相模川で使われた船は、小船、馬船、平田船の三種類で、小船は旅人専用船、馬船は馬が荷物を積んだまま乗ってもの、平田船は船底が平らな船で貨物も人も運んだという。隣の酒匂川の徒歩渡しでは普通の場合は客を瀬や肩に背負って渡し、高貴な人は6人で運ばれる蓮台の上に乗って渡った。

静岡の安部川の「徒歩渡し」の事例になるが、「東海道膝栗毛」で弥次さんは人足の肩に担がれて渡った。しばらくすると、だんだん深くなり腰の上まで水が来た。怖くて人足の頭へしがみつくと、そこは眼で前が見えないとか鼻がふさがれて息ができないとかいわれる。腰から下がずぶぬれになって川を渡った。ホッとして2倍の料金64文と酒手をはずんだ。しかし、終わってよく見ると、浅瀬もあり、わざと深いところを渡ってきたことが分かった、といってボラれたことを悔しがった。



酒匂川の徒歩渡し(オールコック「大君の都」第20章転地)

13 大磯	松並木	2011 年 2 月 6 日
-------	-----	----------------

大磯駅で早めの昼食をすまして、今日の行程はこれでおしまいと思っていると、連れのサンチョ・パンサが、もっと歩こうよ、と言い出した。ドキッとしたが、私の方からやめようぜというのも悔しかったので、行くことになった。歩き始めて間もなく筋肉痛が始まった。田舎に來れば来るほど、駅間が長くなって、なかなか次の駅へ到着できないことに気付いた。次の駅は二宮だった。



ウォーキングしていて、景色が一気に広がって見通しが開けることがある。道路に電柱がなく、電線のたぐいもないために、街が明るく見えるのである。電線を歩道に埋めたケーブルボックス（Cab、電線共同溝ともいう）へ収納し、電柱を撤去する事業があちこちで進んでいる。国道一号線の大磯駅周辺、二宮駅周辺あたりでも工事中である。とてもよいことだ。

今から約 30 年前になるが、私が道路行政を担当した頃、横浜で「イセザキモール」事業があった。たった 300m の商店街のショッピングモール化だったが、電線を地中化し無電柱化するために 3 億円かかるので負担してほしいと東電が主張し、みんなで苦労して負担しあったことを思い出す。

お金があれば1 mでも多く道路を整備したいと考える人が多かった時代だった。それでも私は人が歩く道では、始めて作る時に電柱電線をなくし、ガス・水道・下水と一緒に共同溝化しよう。そうすると30年先に振り返った時に、結果安い費用で整備できたことになる」と主張した。

その時に思い描いた道の姿は、東海道の松並木だった。

この松並木は、歩く人に夏には日陰、雨時には雨宿りを作って旅人を休息させるだけでなく、あの木は自分のお爺さんが植えて世話もしてきたとか、あの並木の下には道があるというように地域のシンボルあるいはランドマークだったはずだ。その道が明治以降、人が歩く道も自動車道でも構わず、電柱や地下埋設物の収容施設に変わって、空いた場所に遠慮がちに街路樹が立つようになった。

特に電柱はこれまでの松並木に代わりに立っているように見える。電柱電線類の並木は誰も美しいとは言わない。むしろ街の景観を著しく悪くさせている。だから、それらは埋めてしまって、地上には松並木を復活させよう。昔の人々が快適と考え、安藤広重らが絵にして後世に残した光景を復活させたい。人が歩く道では、電柱の並木は一掃して、東海道の松並木を復活させたいのである。



14 大磯	エリザベス・サンダースホーム	2011 年 2 月 6 日
-------	----------------	----------------

大磯駅から 5 分位歩いたところにエリザベス・サンダースホームがある。このホームこそ、戦後日本の縮図のような施設だった。



写真は聖ステパノ学園 HP から借用しています。

大磯はかつて、保養・療養の目的で政界人、財界人を中心に多くの著名人が別荘や邸宅を構えてきた。その中には、伊藤博文、山県有朋、大隈重信、西園寺公望、寺内正毅、原敬、加藤高明、吉田茂など 8 人もの首相もいて、「政界の奥座敷」といわれるほどだった。

しかし、昭和 21 年の公職追放、財閥解体、財産税徴収により、上流階級の別荘が売りに出されたり、企業がそれを買取る例が多くなった。一時、吉田茂が大きな影響を有した時に「大磯詣で」があったが、その後は次第に落ち着いた湘南の街の一つになってきた。

売りに出され、物納した別荘を買取る人々の中に、沢田美喜（外交官夫人で三菱財閥の岩崎弥太郎の孫娘）がいた。昭和 23 年、彼女は財産税として物納された旧岩崎家別荘を買戻し、混血孤児のための孤児院を開園した。これが「エリザベス・サンダースホーム」である。

ホームは、占領軍兵士と日本人の間で強姦、売春、結婚で生まれたが親や周囲から見捨てられた混血児たちを収容し、育てる孤児院だった。1948年に開設し、その後成長する子供たちを周囲の偏見から守るため、園内に小学校を設立（S28年）、次いで中学校を設立した（S34年）。成長した孤児たちは社会へ出て活躍するもののほか、米国へ養子に行ったり、外国へ移民した者もあり、昭和55年沢田美喜が死去するまでの32年間に2千人の孤児がここから巣立ったといわれている。

沢田美喜は外交官の妻だったが、熱心なキリスト教徒で、施設の名義も日本聖公会とした。開設当時は大変な資金難が続いたらしい。そんなとき、聖公会の信者で日本に長く暮したエリザベス・サンダー女史が高齢で亡くなりその遺産が贈られ、これに感謝して施設の名前が付けられた。また、付属する学校名も美喜の子供の洗礼名からステパノと名付けられたという。

もともこの施設は占領軍がもたらした混血児の孤児院だったが、近年では理由あって親と暮らせない子供たち約80～90人を育てている。特に学校は平成4年から施設の子供たちだけでなく、外部の一般家庭の子供たちも受け入れている。こういう活動家や施設に出会いその歴史を知ると、経済効率一本槍で来た自分のこれまでの暮らし方、ものの考え方を反省し、キリスト教などの宗教への信心なしで本当に良いのかと考え直す必要に迫られる。



このウォーキングで初めての雨だったが、二宮から箱根湯本まで歩いた。天気予報も雨のち雪だったが、その通りになった。駅を出るときから雨合羽に傘のいでたちである。雨はさほど強くなかったが寒い。酒匂川を超えるあたりから雨が雪に変わった。小田原で昼食をした時、上着はウインドブレーカーだったので、雨がしみ込んで下に着ていたコートが濡れていた。それでもこの雨と雪の中をよく歩いたと思う。

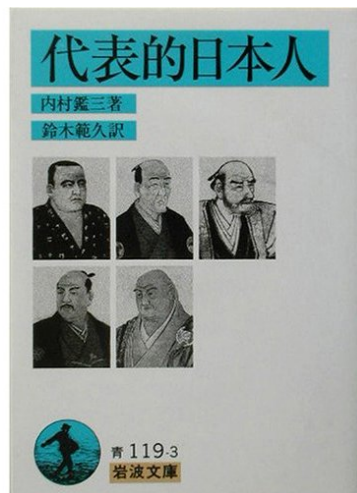


戦争が終わる寸前の S20 年 8 月 5 日、この二宮駅周辺は米軍の機銃掃射を受けた。その中に父と新潟へ向かう高木敏子氏がいて、父が亡くなった。もともと彼女は東京から疎開中で、これまでに二人の兄は軍人として出征して死去、空襲で家と母と二人の妹を失い、父と二人だけだったので、これで彼女は一人っきりになってしまった。その時、空襲で焼けた東京の実家のガラス工場跡から持ち帰った半分溶けた大きなガラスのうさぎの置物を手を持っていた。

高木氏はこの時 12 歳。その少女が目の前で失った父の葬式を出し、家族を亡くしながら、形見になってしまったガラスのうさぎを心の支えにして、けなげに生き抜いた実話が「ガラスのうさぎ」に描かれている。もちろんこのお話は戦争を告発するものである。しかし、それにとどまらず、我々の心を打つのは、家族を失った 12 歳の女の子が必死に生きようとしている姿とその心意気である。

戦争という大きな社会事象の中での事件だったが、何も持たない少女が父の形見の「ガラスのうさぎ」を心の支えにして生きて行こうとする姿に感動する。人はその年齢や時代などの外的要因にかかわらず、人は生きようと努力すればきっちり報われることを教えているようだ。

酒匂川を渡ると小田原はもうすぐだ。酒匂川はアユ釣りで来る。富士道橋、報徳橋、十文字橋などはその代表的釣り場だ。この報徳橋のたもとの町が栢山(かやま)で、二宮尊徳記念館がある。



1894 年に内村鑑三は「代表的日本人」を書いた。その 5 人は、宗教家の日蓮、教育者の中江藤樹、農民の二宮尊徳、地方大名の上杉鷹山、政治家の西郷隆盛である。5 人の代表的日本人に共通するものは何か。敬虔なクリスチャンの内村鑑三は、たぶん、清貧で勤勉、禁欲をキーワードにして選んだのだろうと思われる。そこには資本主義の形成期に生きた内村が、宗教基盤は違うが日本の近代社会の発展に最も重要な資本主義のエートス(精神)に連なる態度が見える。

二宮尊徳というと、私たちが子供の頃にはどこの小学校にもあった薪を背負って歩きながら勉強する二宮金次郎の銅像のイメージにつながる。しかし、勉強する人というのは学校が作ったメッセージで、それが凄いのではない。尊徳の凄さは、農地改良や土地に合った農産物の栽培、合理的な農業経営を進めて、その農業で村づくりに努め、藩財政の改革を進めて、社会改革を行ったところにある。この社会改革の取り組みが評価されて、栢山村(かやまむら)の貧農だった尊徳がやがて侍身分を得て名字帯刀を許されるなど立身出世していった。

尊徳の立身出世の話も日本人が好きな話だが、尊徳には勤勉、禁欲、社会貢献といった資本主義の精神が見えるようで、それを内村鑑三は評価したのである。

17 箱根	箱根東坂	2011 年 2 月 19 日
-------	------	-----------------

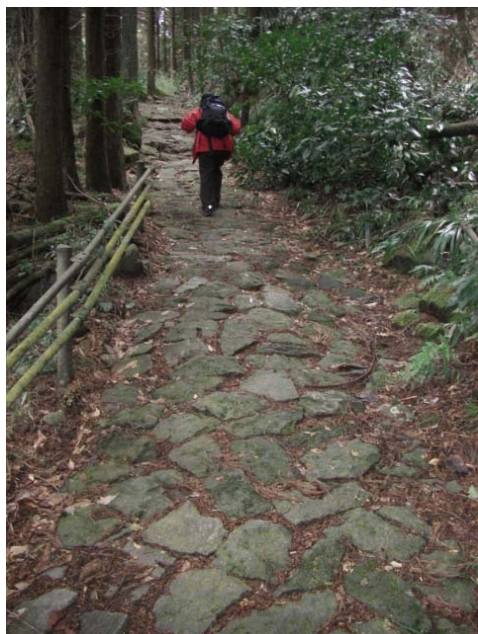
いよいよ箱根の登りに挑戦する日である。サンチョ・パンサは数日前から、もしも足が痛んだらバスに乗るからね、と何度も念を押していた。天気予報は晴れだったが、箱根湯本へ着くころには、雪は降らなかったが予報は外れてうすら寒い曇り空だった。朝 9 時に湯本の三枚橋をスタートするとすぐ上り坂になる。ここから標高 7 百 m の箱根宿まで約 12km の区間は箱根東坂と呼ばれ、深い谷底が控える急坂を石畳道で歩く。3 日前に降った大雪で石畳は滑りやすい。畑宿を過ぎると、残雪が石畳全体に残り、とっても歩きにくい。

寒い曇り空のせいか、ほかにこの道を歩く人もほとんどいない。でも、芦ノ湖が木の葉越しに見えたときは、ほっとした。杉並木を抜けて、14 時に箱根関所にゴールした。



「箱根の山道は石ころがごろごろしている。石は転がっているのではなく、山道に埋まっている。その上を歩くが、草鞋の裏で石を踏みながら歩くというのはひどく疲れる。」と十返舎一九は弥次さんに語らせる。その上に今日の石畳は滑るので、危険でもある。石畳を作る前までは雨のたびに道がぬかるみ、土が流されて、この道を管理した小田原藩は毎年泣かされたという。

七曲りでは、箱根旧道はくねくねと何度も折り曲がりながら高さをかせぐ。しかし歩く方の道は箱根旧道につけられた歩道を歩くところもあるが、突然急階段が出てきて歩行者専用の道を登らされる。自動車を通るときはカーブが多いねくらいしか感じなかったが、確かに「七曲り」は箱根の難所だった。

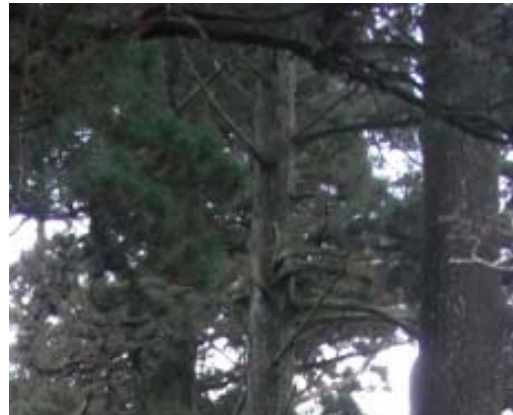


中

央が箱根旧道、その歩道が旧東海道。車が見える道は箱根新道である。



旧街道の杉並木。これまで歩いた東海道は松並木だったが、低温、高湿で雨が多い箱根では松がうまく育たないので、杉が植えられたという。この芦ノ湖周辺の立派な杉並木は約 400 本あると聞いた。ここを抜けると、すぐ横に芦ノ湖が出てきて、間もなく箱根の関所へ到着する。



18 箱根	箱根山戦争	2011 年 2 月 27 日
-------	-------	-----------------

1 週間前に東坂を上り、今日は西坂を下る。予定は、箱根関所から三島駅まで約 16km、約 4 時間の行程。小田原からバスで関所まで来た。湯本までは晴れていたが、上るにつれて曇り空に変わった。寒い。気温 5℃。



箱根関所

関所は今はフリー通行だが、ほんの 150 年前までは通行が不自由だった。顔の見分けがつくようになる明け六つ(午前 6 時ころ)から暮れ六つ(午後 6 時ころ)までが開門時間で、その時間が過ぎると旅人はずっと待たされた。通行には、往来手形と関所手形が必要で、百姓、町人は庄屋や名主が、武士は、藩がその手形を発行した。人々は土地に縛られていて、移動の自由がなかったためである。お伊勢参りなど特別な場合だけ許可されたので、関所は移動の不自由の象徴的存在だった。

高度経済成長が始まった昭和 30 年代初め、この箱根では小田急グループと西武グループが観光開発競争を繰り広げた。途中から藤田観光も参加して、箱根の観光開発の主導権争いが三つ巴状態で展開された。獅子文六がこの争いを「箱

根山」と題して朝日新聞で連載小説にしたため、人々はこの大資本の熾烈な争いを「箱根山戦争」と呼んで面白がった。

しかし、バブルが崩壊して平成に時代が変わる頃から、箱根観光も頭打ちになり、三グループは対立から協調路線へ変わり、平成 15 年には小田急・西武間で業務提携も始まった。協調路線に変わったとはいえ、箱根山戦争の傷痕はまだこの芦ノ湖のあちこちに残されている。たとえばバス。小田急系の箱根登山バスと西武系の伊豆箱根登山バスは、箱根ホテルを挟んで別々にバスターミナルを構えている。小田原～芦ノ湖は両方とも 1,150 円、約 50 分の路線だが、周遊券は相互利用できない。箱根山戦争の主役だった遊覧船も、ともに芦ノ湖を並走するが、小田急系が海賊船で、西武系が双胴船で、船着き場も各々のバスターミナルに接して別に作られている。周遊券もそうで、小田急系は「箱根フリーパス」、西武系は「箱根スマイルクーポン」で、微妙に値段やルートが違う。

獅子文六はこの箱根山戦争について、表向きは小田急系と西武系の争いだが、実は東急と西武の対立だったと述べている。また、「古今を通じて箱根の山はなんとケンカの山であったことか」とも述べる。江戸幕府が関所を築造した時、箱根権現の門前町だった元箱根が宿場町になるのを拒んだため、関所と反対側に箱根町を作った。その後箱根町（宿場町）は繁盛し、元箱根はさびれだした。この時以来両町は何かにつけて対立しあうようになった。また、強羅と宮城野、仙石と元箱根の対立もある。文六は特に戦後、道が開け、ガソリンのにおいをまき散らす車が増えた頃からケンカが激しくなったとも述べている。

「箱根山」は大資本の争いを背景にして、若い旅館経営者が地方の小資本として頑張る話である。大資本が国の官僚や政治家を巻き込んで展開する陣取り合戦はそれとして面白いが、小なりといえども簡単に大に飲みこまれずに頑張る様子は何ともほほえましい。

今日の箱根で考えさせられることは、大資本の競争の良しあしとはとは別に、競合する区間は何でも二重投資になっただけでもったいないなと思う。相互乗り入れのシステムに変えれば、どちらか一方しか施設がない場合にも他の側の券が使えるようにすれば、利用者側の利便向上はもちろんだが、相乗効果によって施設側のパイの拡大、利用総額の拡充は確実に発生するだろう。なんともったいないことかと思う。

18 箱根	箱根西坂	2011 年 2 月 27 日
-------	------	-----------------

寒い。気温 5℃。

9 時に関所前をスタートして、14 時半に三島着だったので約 5 時間半の強行日程になった。

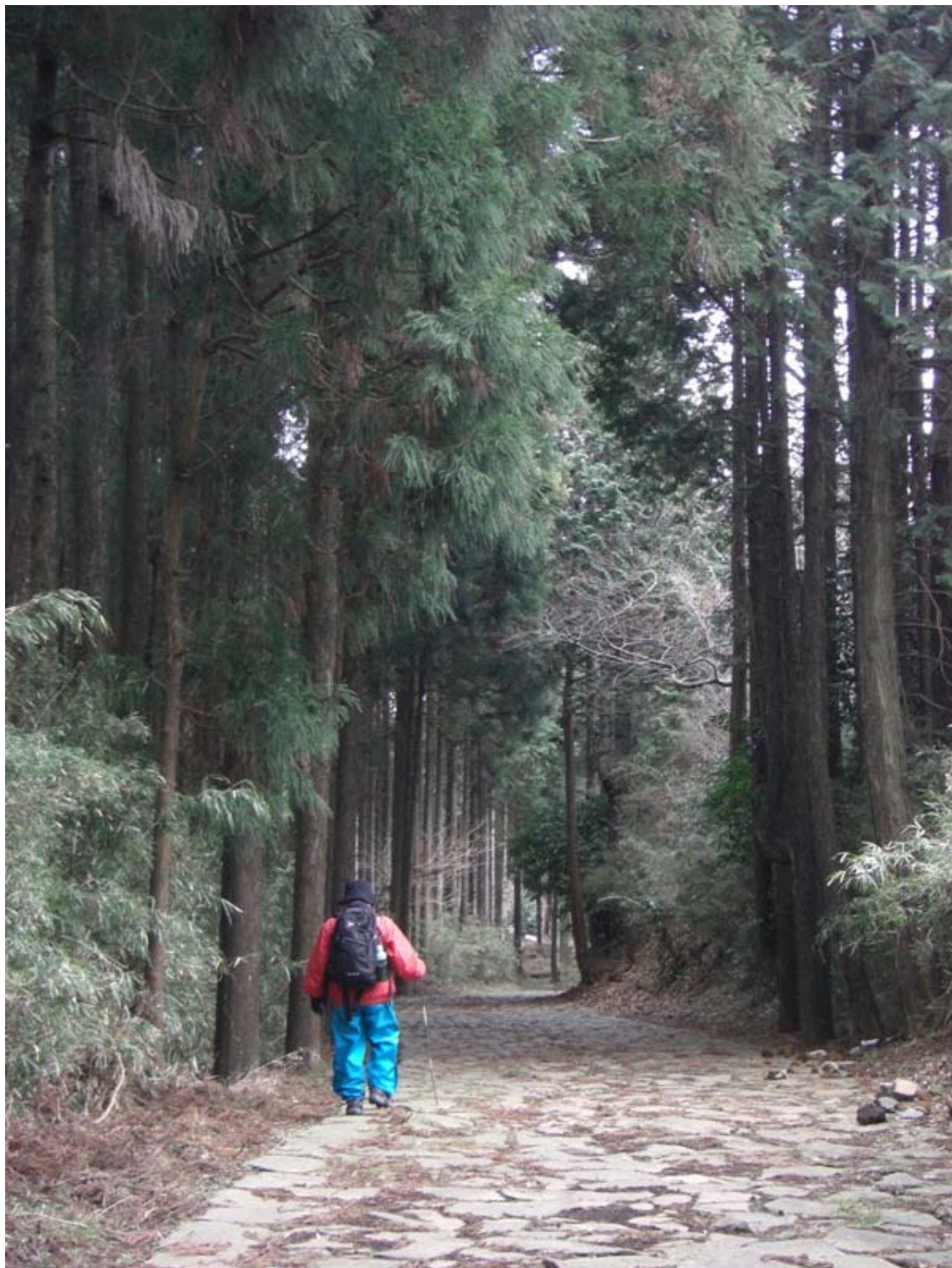
三島大社へ着いた時には、ドン・キホーテとサンチョ・パンサはともに足ががくがく、もう歩きたくない状態で、名物の「うなよしのうなぎ」も食べられなかった。三島から新幹線で帰宅したので、16 時 10 分には自宅に到着していた。



箱根の下りはとても芸術的な道が続く。萱がトンネル状態になっている道が続くのである。

1 号線はくねくねと蛇行して下るが、東海道はまっすぐに下る。だから 1 号線からみればショートカットしたようなもので、7, 8 百 m 下ると 1 号線を横断し、また次のショートカットの道へ入る。

この萱のトンネルは 1 号線を走る車の姿はもちろんのこと、音も消してくれる。また、風だってさえぎっている。何よりも大勢の人々がこの道を歩いているらしく、萱のクッションで踏みしめられた道が心地よい。



山中城跡を過ぎると、三島市役所が整備した東海道になる。幅 4.5m、石畳の舗装でも東坂は昔風にごつごつした舗装だったが、ここは今風に比較的平らな舗装である。東坂と違い今日はひたすら下り坂だから、竹で作った杖がブレーキ替わりになっている。ちょうど杉が花粉をまき散らす時期らしく、両

側の巨大な杉が風が吹くとギーギーと音を出して揺れて、黄色い花粉を霧状にまき散らしていた。道はきれいだが、慣れてくると歩きも単調になり、サンチョの足取りもだいぶ重くなってきた。



塚原新田で東海道は1号線と合流する。三島側から箱根を上る人には、ここから箱根路に入るということになる。下る我々には空も晴れて、ここで箱根路がお仕舞いになったというサインになるのでうれしい。この先で1号線と東海道が合流し、1号線の並木道の歩道が東海道になる。



三島大社

階段を4段上ると神社の境内になるが、今日のわれわれはとっても疲れており、一刻も早く三島駅に行き、電車で足を伸ばしたいので、神社は覗くだけにした。

19 三島	柿田川の越年アユ	2011 年 3 月 5 日
-------	----------	----------------

静岡県入りして 2 回目。今日は三島から原までの約 14km。久しぶりの快晴である。前回の箱根の下山で痛めた足もすっかり回復した。今日の道中は一番富士山に近い場所だから、一日中富士山を見ながら歩くことになりそう。

歩きだしてまもなく、3 組の東海道ウオークのグループに出会った。これまではほとんど会わなかったが、近年東海道ウオークが流行りだしたということなのか。最初のグループは 6 人連れで中年の男たちに女性が一人混じっていた。彼らの歩き方は早い。後ろで声がしたかと思うとすぐ我々を追い越して間もなく見えなくなった。2 番目は 50 歳代の夫婦連れで「こんにちわ」と言いながら追い越して行った。3 番目は 60 歳代の一人旅の男だった。最初の 6 人組は原駅前の食堂でまた会った。



アユの産卵(国土交通省 HP から借用)

三島を過ぎると清水町へ入る。三島と沼津に挟まれた町で、これまで何度か沼津市と町村合併話があったが、いまだに実現されていない。

その清水町の真ん中を流れる川が柿田川である。川と言っても大河でなく、国道 1 号線の下から湧き出して狩野川へ流れ込むまでの幅 30m、延長 1.2km の川に過ぎない。しかし、この川は富士山の伏流水が大量に湧き出して越年アユが住む川として有名である。また、ナショナルトラスト運動が早くから活発に行われてきた川としても有名である。

柿田川ではあちこちで湧水がみられる。この水は富士山に降った雨や雪が長い時間を経て三島溶岩流へしみこんで湧き出しているという。湧水量1日100t、水温は年間を通じて15℃。

毎年10月中旬頃から、狩野川本流を下ってきた落ちアユが柿田川へ入り、1月中旬頃まで産卵する。アユは一年魚で普通産卵すると死んでしまう。しかし、柿田川では川の水温が冬になっても下がらないため、産卵もせずに年を越して生息する越年アユが毎年多く発生する。不思議な川である。

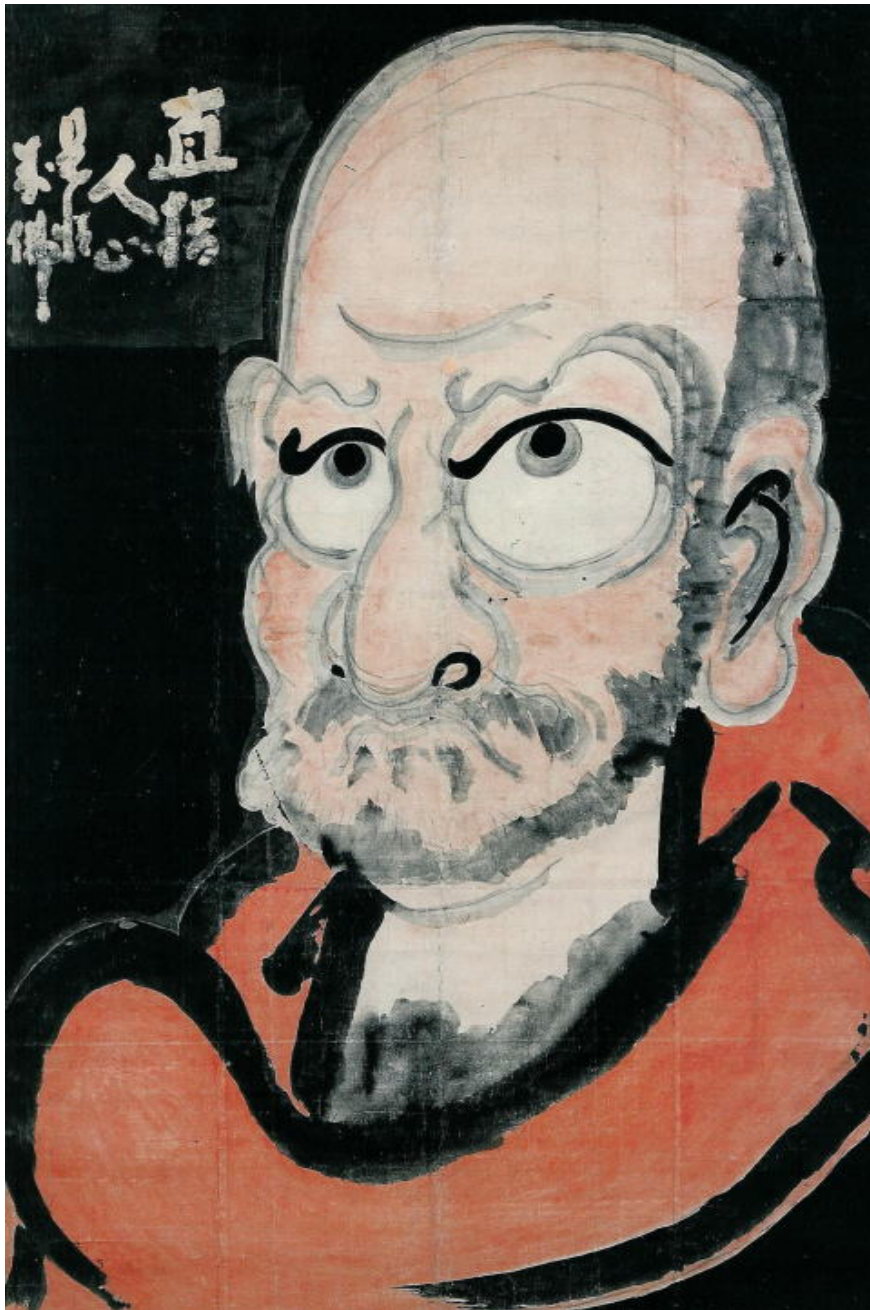
そして、ここのアユはエサ釣りで釣ることができる。アユはふつう川の中では石につくコケ(珪藻)を食べているので、「友釣り」で釣るが、ここではシラスのようなエサで釣ることができるという。これもまた、まことに不思議な川の話である。



(Kakitagawa info01.net から借用)

20 沼津	はくいんぜんじ 白隠禅師	2011 年 3 月 5 日
-------	-----------------	----------------

沼津を過ぎると、単調な道が続く。右手に愛鷹山越しに白い富士山が見え、左手にはもう1本の道路と千本松原があって駿河湾があるのだが、海は全く見えない。道は車が多く、人々はひ字溝のふたの上を歩く。東海道本線の踏切をわたって約1km行くと、左側に「松陰寺」がある。江戸時代中期に、臨済宗の中興の祖「白隠禅師」が布教した寺として有名だった。



朱達磨(大分県・万寿寺)

白隠は禅画をよく書き、達磨、釈迦、観音様を描いた。「朱達磨」には「直指人心（じきし じんしん） 見性 成仏（けんしょう じょうぶつ）」と書かれている。禅宗の悟りを示した言葉で、坐禅により自己の本来の心性を徹底的に見つめれば、それが仏の悟りに他ならないという意味といわれている。

他の書画もそうだが、極太で単純化された輪郭、大きな目や鼻、黒の背景に際立つ朱色は、力強さ、明快さ、愛らしさで人を引き付ける。白隠が80歳を超えた最晩年に描いたというが、その躍動感に驚かされる。また、彼の書がいい。肉太で、揺れていない字である。字のハネや返し、上がり下がりといった細部を全く無視しているもがいい。



松陰寺からは富士山も上半分がしっかりと見える。白隠は、江戸中期の1685年にこの原で生まれ15歳で出家。19歳の時（1704年）から諸国修行へ出て、32歳（1717年）の時に再びこの松陰寺へ戻っている。

その間の1707年12月16日～12月31日に宝永大噴火が起きた（白隠22歳）。この大噴火は溶岩流こそなかったが、激しい地震による家屋倒壊で大勢の犠牲者を出すとともに降灰で広範囲の畑や用水路を耕作不能にさせたともいわれている。この原一帯も富士山の足元だったので、大噴火による直接的被害だけでなく、その後の大飢饉などの2次的被害でも大勢の死者があったと思われる。

白隠はその惨状を直接見ることはなかったが、被災後10年後に帰郷した時にはまだ復興途上だったろう。何をしたかの記録を見ることはできなかったが、白隠も復旧に相当尽力したに違いない。

「駿河には過ぎたるものが二つあり。一に富士山、二に原の白隠」という言葉がある。この歌をある人々は白隠が臨済宗の復興に力を入れたことを指すと言うが、私には大噴火後の郷土の復興に尽くした白隠を讃えているように聞こえてならない。

21 吉原	富士登山	2011 年 4 月 3 日
-------	------	----------------

3・11 東日本大震災で、港湾住宅にも被害が生じてその処理にあたっていた、また、サンチョ・パンサの母が 92 歳の大往生を遂げてそのお葬式に行っていた、さらに娘夫婦が自宅を新築して引っ越し騒動があった、などいろいろな出来事が重なって、ウォーキングが中断したが、4 月 3 日(日)から再開した。

今回はマイカーで前回の終着点・原駅まで行き、駅前に車を置いて、東海道を約 13km、富士まで歩いた。富士駅から電車で原駅へ戻り、再び東名高速で帰宅した。これからはばらぐの間このパターンが続くそうである。

原を出発してまもなく、吉原へ入る。昔は沼地で葦がたくさん生えたところだから吉原というのだそうである。今ではそんな面影はなく、製紙工場のいくつもの巨大な煙突が日曜日というのにもくもくと白煙を出しており、町中で薬の臭いがした。

その吉原には三つの吉原がある。最初の町が「元吉原」で、次いで東海道線の駅がある「中吉原」へ移転し、さらに今の「吉原本町」へ移転したという。どうしてこうなったかという、もともとは「元吉原」が中心地だったが、江戸時代に 2 回の大津波(1639 年、1680 年)があつて壊滅的被害を受けたために、町全体が移転したというのである。今、3・11 大震災で三陸地方の町が直面している事態と同じ光景が、4 百年前頃にここで起きていたのだった。

吉原駅を過ぎると、茅ヶ崎に次いで 2 か所目の「左富士」の場所にでる。江戸時代に大津波の被害を繰り返さないように、町の移転とともに東海道も海から離れて、富士山も左手側に見えるほど内陸側へ大きく湾曲されたのである。今は製紙工場の間を歩くようになっていて、1 本の松が残るのみであるが、昔は景勝地で、その頃の吉原は富士登山のスタート地点でもあった。



1859年に着任した初代英国公使オールコックは、約1年後の1860年9月4日(安政7年7月19日)に横浜から富士登山へ出発した。公使館の館員ら8名の英人のほかに警護や従者などで馬30頭以上、総勢100名を越す団体になったという。

幕府は当初、この富士登山に反対してやめさせようとした。その理由は、外国人に対して開港場から十里四方以遠への移動は認めないルールがあって、公使といえども通行制限に従わせようとしたものだった。また、富士山は信仰の山で大勢の信者が登山しており、信者と外国人の間のトラブルを恐れたこと、さらに既に登山の時期を過ぎて安全が保証できないことなどがあげられていた。

これに対して、オールコックはことごとく反論する。厳しい通行制限は貿易振興を図る英国には許しがたい措置で、外国人を監禁する措置にはかならないのだから、外国商人たちに監禁状態から脱出するパフォーマンスを見せよう。また、オールコックは、攘夷派による外国人排除運動が当時の幕府や朝廷の一部が画策したもので、一般の人民との接触でトラブルが起きることはないと確信していた。さらに、山へ登ること自体を目的とする「スポーツとしての近代登山」に親しんできたオールコックからみると、登山の安全性については十分配慮した上の行動で、幕府からあれこれ言われるものではなかった。

一行は、東海道を歩いて箱根を超え、吉原宿へ到着した。ここから東海道と別れ、9月10日早朝から今風にいえば富士宮ルートを1合目から登り始めた。当日は何合目かは不明だが室堂へ宿泊して、翌日の9月11日、薄い空気にあえぎながら頂上へたどり着いた。頂上では英国旗を掲げ、ピストルを発射して英国歌を歌ってシャンパンで乾杯した。その日は山頂で宿泊して、翌9月12日に下山した。今でもそうだが、彼はこの山に登るには約8時間かかるが、下るには3時間もあれば十分だった、とも述べている。

帰路は、9月13日に富士宮を出発し、吉原で東海道へ入って、三島から狩野川沿いに韮山を経て、熱海で2週間逗留した。その後には2代目英公使パークス夫人やアーネスト・サトウらも登山しているが、多分、この登山が西洋人による初めての富士登山であり、また、日本で初めての近代登山だったといわれている。そしてこの近代登山さえ、日本人の古くからの信仰を壊して実行されたことに改めて驚かされる。

22 富士	富士川舟運	2011 年 4 月 9 日
-------	-------	----------------

富士駅からスタートして、蒲原を経て由比まで歩いた。

雨の中だったが、富士川は水量が豊かで本当の川らしい。川を渡ると岩淵の町へ入る。「富士川西端」の信号で東海道は左に曲がるが、右へ行くと土手に「富士川舟運」の終点だった場所を示す常夜灯と水路を開拓した門倉了以(すみのくら りょうい)の石碑がある。ここから蒲原へ向かう東海道は、山へ入る。今の道路は川沿いに造られているが、昔はこの富士川が暴れ川でしばしば氾濫したので、道は川が埋め立てできた三角州でなく、山の中に道が作られたようだ。



江戸時代に年貢米による課税が始まると、お米や雑穀を中心に消費都市・江戸と商業都市・大阪の間で廻船による長距離物流が始まり、次いで沿海部と内陸部の間で河川舟運による中距離物流が行われるようになった。この航路開発と河川舟運の整備による物流の発展は、交通ネットワーク整備にとどまらず、農村と都市の間で消費物資や原材料供給、資本の還流を引き起こして、大都市江戸の発展のロジスティック・システムを形成した。

「富士川舟運」は中距離輸送の河川舟運の典型的事例である。富士川の山梨県の鰍沢と静岡県岩淵(富士市)の約 72 km 区間の急流に、1607 年(慶長 12 年)ころから、徳川家康の命を受けて、京都の豪商門倉了以が難工事の末、川を開削して航路整備された舟運である。

その結果、高瀬舟(笹舟)が行きは半日で下り、帰りは船頭たちが縄で船を曳いて 4~5 日かけて上った。それまでは人馬が背中に乗せて荷物を運んでいたもので、舟の登場は大量輸送を可能にし、大幅に時間短縮した。このルートでは、下り荷は江戸や駿府への年貢米や、雑穀、果物、タバコ、織物で、上り荷は塩、海産物、砂糖、瀬戸物が中心で、甲斐と駿府を結ぶ物流の大動脈となった。

年貢米は、岩淵河岸へ着くと馬や大八車で蒲原町まで行き、そこから小回り船で清水港へ運ばれ、大型船に積み替えて江戸蔵前まで運んだという。逆に、上り荷の塩は、鰍沢で陸揚げされると、甲州や信州伊那、佐久地方へ運ばれたといわれている。

この甲州年貢米を清水で扱ったのが清水次郎長で、甲州側では黒駒勝蔵がいて、富士川水運の発展がヤクザの抗争も引き起こした。

明治になると、貨物が多様化、大量化し利用客も増加したため航路改修が進み、舟も大型化した。その後、帆船やプロペラ船も登場したが、明治

22 年東海道線、明治 36 年中央線が開通すると、舟運は急速に衰えはじめ、昭和 13 年に身延線が開通すると舟運は完全に終焉した。



23 蒲原	東海道を大切にする町	2011 年 4 月 9 日
-------	------------	----------------

富士川を越すと、東海道は山道へ入る。東名高速や新幹線のガードを越して、坂道を下ると、再び海のそばへ出てきて、蒲原の町へ入る。蒲原は東海道をとても大切にしている町だった。次の由比もまた、東海道に加えて、漁業で町の活性化を進めている元気な町だった。



蒲原の町では、古い家屋が大切に残され、家ごとにその来歴を記載した小さな看板が掛けられていた。道はきれいな舗装で、楽しく歩ける道だった。散策する人に向けてあちこちに小さな休憩所もあった。

隣の富士市では、東海道に時々標識があるだけで、何ら特別な対策がなされていない。我々が歩く歩道は、路肩のU字溝のふたの上で、幅も狭かった。この隣り合う二つの町を見ても、東海道という歴史遺産を大切にしている町とそうでない町の違いが明白だ。少し誇張になるかもしれないが、町づくりの面から見て、行政が市民と一緒に仕事をしているかどうか、また町の歴史を大切に未来へ渡す努力をしているかどうかの踏み絵に見える。

由比の町へ入ると、漁業がとても元気である。東日本大震災の影響で、地震や津波に皆さんがとても神経質になっているが、歴史遺産の東海道に加えて、シラスと桜えびで町を活性化しようとしている様子が心地よい。

24 由比	さつ たとうげ 薩唾峠	2011 年 4 月 17 日
-------	----------------	-----------------

咲くのが遅かった桜もやっと満開を過ぎて散り始めた。晴、気温 20 度。歩くと汗ばむ陽気である。今日は由比から薩唾峠を越えて興津を経て、清水を目指す約 12km の行程。由比の街は街歩きを楽しむ老若男女でとても賑わっていた。特に桜エビとシラスに注文が集まっているようで、食べ物屋さんはどこも客が列をなしていた。先週の雨降りの日に来た時は閑散としていたが、今日は様変わりだった。



薩埵峠の展望台からみる景色は、昔、広重が描いた「東海道 53 次・由比」と同じ構図である。違うのは道路や鉄道があるかないかである。蒲原からこの由比のあたりにかけて山が海岸線へ迫ってくるので、人は山と海の間のせまいところを横長に伸びたあたりに住んでいる。東海道、国道 1 号線、東名高速、東海道本線などの交通と物流の大動脈もまた、その狭いところへ集まっている。好天気だったので、穏やかな駿河湾の向こうに伊豆半島や三保の松原がくっきり見える。

由比から薩埵峠へ上る道は急斜面の中を上っていくので、右側が畑で、左側が急に落ち込む崖である。右側の広くもない畑には夏ミカンやポンカンが沿道に鈴なりに実っていた。途中の展望台にはちょっとした休憩所があって、座ることもできる。休憩所付近を写真に撮ったが、本当にこんな道を大名行列が通ったのだろうかと何度も考えた。



25 興津	せいけんじ 清見寺	2011 年 4 月 17 日
-------	--------------	-----------------

興津駅を過ぎて約 10 分、総門と本堂の間を東海道線が横断する清見寺がある。大そう歴史が古いお寺で、7 世紀後半に開かれて、足利尊氏、今川義元、徳川家康らが関係したらしい。特に徳川家康はまだ竹千代と呼ばれた幼少時代に今川家の人質になったが、その時に清見寺に滞在したようで、「家康手習いの間」が今も保存されている。江戸時代には朝鮮通信使らが訪問するなど徳川家とは縁が深いお寺さんである。明治以降もこの古刹には島崎藤村、夏目漱石らの文人墨客も多く訪れて清見寺を詠んだ歌も数多く残されている。

その一人に福沢諭吉がいて、福沢は、「瘦せ我慢の説」で、碑文を書いた榎本武揚を批判した。



境内の碑は、幕末期に榎本武揚が軍艦数隻を率いて函館へ脱走した際に、そのうちの一艘の咸臨丸が故障し、清水港へ修理しにきて、賊艦として官軍兵士に攻撃され戦死した兵士を慰霊したものである。榎本武揚が次のように揮ごうしている。

「食人之食者死人之事」（人の食を食むものは人のことに死す）

いい文章とは言えないが、その大意は、禄をいただいた主君のために人は殉じるべきだ、という意味である。この碑文は、かつて自分は徳川方で禄を得てきたが、心ならずも明治維新後も生き続けている。ここ清水港には、徳川のために大勢の兵士が死んだと聞いて、榎本が思わず恨み嘆いたものである。

この碑文を福沢諭吉が読んで、後年「瘦せ我慢の説」で次のように述べている。「三田」の項でも書いたことだが、江戸城の無血開城で勝安房は「瘦せ我慢」を旨とする武士の気風を損なった。これに対して、榎本武揚は函館で官軍に徹底抗戦した。榎本は「瘦せ我慢」のよい例で勝の場合とは全く異なっているようにみえる。しかしながら、降伏後の榎本をみると、維新政府の高官まで上り、富貴も名誉も得た。一緒に戦った武士は地下で不平を鳴らしているに違いない。本来隠遁すべきなのに安閑と暮らしていることが許されない。勝も榎本も政治上は既に死んだのだから、その苦難を受け入れるべきだった、と言うのである。

明るく春の晴れた日に清見寺の殉死した兵士碑の前に行くと、福沢諭吉に難詰された榎本武揚が苦々しい心持で庭を歩きまわりながら清水港を見ているように思える。



26 清水	清水次郎長	2011 年 4 月 24 日
-------	-------	-----------------

昨日は大雨だったが、今日は快晴。清水から静岡まで歩いた。歩数は2.3万歩。清水駅前では文化会館、東静岡駅前では駅前再開発が各々整備中で、静岡駅前では静岡市美術館が竣工したばかりである。この長引く不景気の中で、どこの自治体も財政は危機的状況だというのに、この静岡ではそんな気配が見えないことに大いに驚かされた。



次郎長生家

清水港は、日本書紀に「清水湊」として登場するほど長い歴史を持つ天然の良港である。江戸時代には、甲州年貢米が富士川水運で岩淵(富士市)へ着くと清水港へ集められて、大型船に積み替えて江戸へ回送された。清水港は、大阪と江戸を結ぶ長距離輸送の主要な中継基地で、多くの廻船問屋がいる湊だった。

明治になると、廻船問屋の特権が奪われ、清水港も一時さびれたが、国際貿易でお茶がシルクに次ぐ重要な輸出商品になると、牧の原台地などでお茶の大幅な増産が始まり、横浜港へのお茶の移出港として栄えた。

1889 年東海道本線が開通するとお茶の輸送は鉄道中心になり、再び清水の海運業は衰退した。しかし、1899 年に開港場に指定されると、お茶の直輸出が可能になって、お茶を扱う商社も進出して、清水港は茶の輸出港として再生した。

清水次郎長は、幕末から明治にかけて、この清水港振興に尽力した。次郎長は、舟持ち船頭の父をもち、のちに養子となる叔父が甲州年貢米を扱う廻船問屋を営む家系にあって、清水港に縁が深いやくざである。

前回の「清見寺」でも取り上げた咸臨丸襲撃事件で、乗組員は官軍から賊艦として攻撃され、全員が殺されて海へ投棄された。賊軍に加担する者は厳罰に処すというお触れもあり、遺体はそのまま海に浮かんでいた。その時次郎長は「死んだら仏、仏に官軍も賊軍もあるものか」と言って、厳罰覚悟で遺体を収容し、埋葬した。次郎長は藩に呼び出されたが同じ趣旨のことを堂々と述べたという。

これに感銘した静岡県大参事の山岡鉄舟は、旧幕臣だったこともあり、次郎長が乗組員を慰霊して立てた墓碑に「壮士之墓」と揮ごうして、その偉業を後世に伝えた。この事件を機に、次郎長はやくざ稼業をやめて、本業の廻船業だけでなく、お茶栽培による開拓事業などの地域貢献事業にも参加するようになった。広沢虎造の浪曲の世界に登場する次郎長は「義理と人情」の人だが、後半生はそれに「恩返し」も加わったようである。

次郎長を清水の人々はとても愛しているようだ。彼が多くの人に慕われる秘密は、彼が、GNO（義理、人情、恩返し）を体現した人だったと考えてもよさそうだ。



27 静岡	江戸城を去った徳川家	2011 年 4 月 29 日
-------	------------	-----------------

静岡には徳川ゆかりの施設がたくさんある。駅前には強い家康像が東の空を睨んでいる。その先には、駿府城、臨濟寺、浅間神社、久能山東照宮などがある。いずれも家康ゆかりの施設である。青春期の今川家人質時代と引退後の大御所時代を静岡で過ごし、死後には東照大権現、神君と崇められた家康が中心になるのはわかる。しかし、その徳川の最後の将軍だった徳川慶喜もまた、静岡にはとても縁が深かったにもかかわらず、影が薄いのはどうしたことか。不公平な処遇ということもできよう。

慶喜は 1866 年 12 月 5 日に第 15 代将軍に就任し、1868 年 4 月 10 日にその座を去って、江戸城を無血開城した。幕末の大激動期だったとはいえ、その間わずかに 17 カ月だけの将軍だった。その慶喜の早すぎた引退を最も惜しんだ人の一人にイギリス公使、ハリー・パークスがいた。



4 月 11 日江戸城無血開城で慶喜は一旦水戸へ退去したものの、7 月 23 日に海路を清水港経由で静岡へ移住し、1 年余にわたり宝台院で謹慎生活を送った。戊辰戦争終了後、謹慎がとかれて元代官屋敷(現・浮月楼)へ移転。ここで約 20 年間を過ごし、明治 21 年 3 月に、それまでの紺屋町から駿府城の反対側に位置する西深草町へ移転し、10 年余住んだ。その後、公爵となり貴族院議員になって東京巣鴨へ移住するが、彼の静岡時代は約 30 年にわたった。

1866年7月5日、第14代家茂（いえもち）が大阪で病死すると、その後見役だった慶喜（よしのぶ）が第15代将軍に就任した。慶喜が最初に行ったことは、約1年前に解決した勅許問題で積み残した兵庫開港問題の解決だった。翌年3月の英米仏蘭の公使らと会談を行い、兵庫開港の勅許を得た。これにより薩長らの従来の攘夷運動は全く名目を失い、その後は明らかに倒幕運動となった。

外国公使との会談は、萩原延壽氏の「遠い崖」（第4巻「慶喜登場」、朝日新聞社）が詳しい。外国との通商条約の是非を巡る国内の争いは、薩英戦争や下関戦争の藩側敗北で決着していた。条約を1日も早く履行して、開国により経済発展することが重要で、その経済発展に幕藩体と新体制のどちらがふさわしいか問われるようになっていた。実はそのことを早くも理解していた慶喜は、外国公使団との会談で、兵庫開港を含む条約義務の遵守やヨーロッパ文明の導入、を明確に述べたといわれる。英公使パークスは、将軍はこれまで知り合った日本人で最も優れた人物といい、仏公使ロッシュは慶喜は家康、家光の再来を見る思い、と述べている。敵対する岩倉具視は「一の頸敵」、木戸孝允も「家康の再生」と呼ぶほどだった。

しかし、1868年1月3日鳥羽伏見の戦いで幕府側が敗北し、慶喜が江戸へ帰還すると、1月7日慶喜追討令と2月9日東征の開始で幕府側が賊軍にされた。こうして一気に江戸城無血開城へ進むことになった。

慶喜が鳥羽伏見の戦いに破れて海路江戸へ帰った時、大奥にいた天璋院（13代将軍家定夫人）や静寛院宮（14代将軍家茂夫人）らから朝敵の汚名をこうむり、幕軍を捨てて逃げ帰ったことを叱責された。その慶喜は神君・家康だったらどうしたかを考えて、いま日本を二分して再び戦乱の世に戻すことは許さないだろうと思ったと弁明したという。このあたりの慶喜の思慮が今のわれわれには十分知られていないし、慶喜の評価が低くなっている理由ではないかと思われる。

4月10日篤姫たちが大奥を去り、慶喜が水戸へ逃れると、官軍が江戸城へ入場した。5月15日彰義隊も壊滅して、徳川家を相続した第16代宗家・家定は、5月24日駿河府中70万石を命ぜられて静岡へ移住した。7月23日には水戸から慶喜も移住した。

続いて、8月から10月の間に、旧幕臣たちも新政府に仕えるか静岡へ移住するかを迫られたが、多くの人々は新政府に仕えることを潔しとせず、無禄の難民として海路で静岡へ移住した。その数は旧幕臣が13,764名で、家族や従者を合めると数万人に上ったと推計されている。

その後、1871 年、廃藩置県で家達は東京へ戻り、その後英留学を経て、公爵になって貴族院議員として生涯を送った。また慶喜は約 30 年間を静岡ですごしたのち、公爵になり貴族院議員として余生を送った。決して華々しくはないが、静かな余生を送ったと思われる。

これに対して旧幕臣たちの生活は悲惨を極めた。慶喜の謹慎生活ぶりを探偵が新政府へ送っているがそれには、「駿遠総体ノ人民、藩士入込以来、益々困弊ニ及ビ候事、但シ人数ノミ相増シ、米穀野菜等不足ニ付、困弊ニ及ビ候也」というほどだった。移住後の家臣とその士族授産は別に述べることにする。



28 丸子	宇津の谷峠	2011 年 4 月 29 日
-------	-------	-----------------

静岡をスタートし、安倍川を渡ると、左手に満観峰が迫ってくる。その峰をまくように東海道は、国道 1 号線と並行して丸子宿に入り、その先で宇津の谷峠に入る。

岡本太郎の母、岡本かの子は昭和 13 年、雑誌「新日本」へここを舞台にした短編小説「東海道 53 次」を書いた。この短編は、何か特別な色恋や暴力、名物を描いているわけではない。時間から取り残されたような街道があつて、道を歩くことの楽しさや何があるんだろうかというドキドキ感を高ぶらせるような魅力を見出して、喜んで東海道を何度も歩く、いわば「東海道人種」について淡々と描いているのが面白い。

* * *

大正 10 年ころの話である。岡本かの子は、岡本一平と養子縁組することになった。その婚前旅行に丸子から島田へ東海道を歩く旅へ出た。二人は静岡から人力車で丸子へ出て、名物とろろ汁を食べた後、宇津の谷峠へ行く。峠でお茶を飲んでいて、主人の友人の作楽井（さくらい）氏に出会う。

作楽井氏は、東海道は山川海の配置がよく、宿がいい具合の距離にあつて、旅の面白味からいってもめったに無い道筋だ。「東海道ができて 300 年、幾百万の人々の旅の寂しさや気晴らしなどの思いを、街道の土、松並木、宿々の壁に染み込ませてきた。その味が情にもろい人間をマヒさせる。ここの宿を朝だちして、晩にはあの宿へ着こう。その間の孤独にも動かされる。前に立った宿には生涯二度と戻る時はなく、次の宿が自分の唯一の目的に思われる。旅にはこうした気持ちはつきものだが、この東海道ほどその感を深くするものはない。何度通っても新しい風物と感慨に浸れる」とも述べている。

このように東海道に魅せられて俗界を忘れてしまった趣味人が作楽井さんで、彼は大津へ着くと汽車で品川へ戻り、再び歩き出す。こうした趣味人の仲間が大分居る。ひょっとするとあなたもすでに仲間かもしれないよ、ともいう。

それから 20 年後、かの子は名古屋で作楽井氏の息子・小松技師の訪問を受ける。国鉄技師の小松氏は、東海道 53 次観光事業を夢見ており、その節はぜひ力を貸してくれという。岡本夫婦は伊勢路を汽車で走りながら、20 年の歳月を経た交流の中に人生に脈打つものを感じていた。



宇津の谷峠の街並み

この町は、丸子宿を過ぎていよいよ峠道にさしかかる登り口にある。今でもこの町には各家々に、屋号があり、それが民家の玄関に掲げられている。



丁子屋(丸子宿)。丸子宿の端に、昔ながらの姿で昔のままにとろろ汁を食べさせる「丁子屋」がある。かの子は「53 次」で、老婢が運んできたとろろ汁を見て、別に変った作り方ではなかったが、炊き立ての麦飯の香ばしい湯気に神仙の土のような匂いのする自然薯は落ちついた美味しさがあつた。私は香りを消さぬように薬味の青海苔をふらずに椀を重ねた、と述べている。



「明治のトンネル」。家並みを過ぎて坂を上りきると、明治のトンネルがある。わざわざ頭に時代名を振るのはどうしてかと思ったが、右下にある現在の県道のトンネルが「大正のトンネル」で、右下の国道の上下線に分かれた2本のトンネルが「昭和のトンネル」、「平成のトンネル」と名付けられていると説明板があつた。この明治のトンネルは、今は歩行者専用で、薄暗いけれども等間隔に照明灯がぶら下がっており、藤枝側から吹く風がトンネルの冷氣と一緒に、さわやかな気分させる。

29 岡部	楽しい屋号	2011 年 5 月 1 日
-------	-------	----------------

岡部から島田まで歩いた。小雨だったが、GW3 日目なので、早めに出発した。そのおかげで朝は渋滞もなく快調だったが、帰路がだめだった。ウォーキングを終えて、午後 2 時過ぎに焼津 IC に入ったとたん到大渋滞に巻き込まれた。U ターン渋滞である。結局 2 時間半の予定が 5 時間半かけて横浜へ戻った。



岡部宿は山の中だが、東海道を中心にして個性的な街づくりがされている。2001 年に国土交通省が旗を振り、「東海道 400 年イベント」が各地で実施された時、この岡部でも道路拡幅、カラー舗装、無電柱化を行ったと聞いた。それに合わ

せて、隣の丸子宿などと連動して、各家に屋号をふって軒先に掲げる事業もした、という。

この屋号運動は、各家がその歴史を振り返り、家ごとに特徴、個性を出していると同時に、その爽やかな個性づくりを通じて、屋号の由来や事業の歴史などを材料にして我々のような旅人とその家の人たちとが会話を始める大きなきっかけになっているように思う。

日本は今後本格的な人口減社会に突入しているが、そうすると、早いか遅いかの違いはあっても、どこの都市でも人口減少が起きてくる。我々は、これまで拡大再生産する経済しか見てこなかったが、今後は縮小する経済を見ることがになると予想されている。

都市もまた、成長する都市ばかりでなく縮小する都市が現れる。そんな場合に、重要になるのが観光やコンベンション事業のような集客事業が期待される。都市内の絶対人口が増加しない以上、回遊する人口を集めてにぎわいを作り出し経済効果を高めることができるかという集客戦略が重要になるのだ。人口減社会では集客を目的にする都市の個性づくりはとても効果的である。



30 島田	大井川の川越遺跡	2011 年 5 月 3 日
-------	----------	----------------

島田駅から西へ約 2km 行くと、大井川の左岸の東海道に沿って、「島田宿大井川川越遺跡」がある。旅人に「川札」を売った「川会所」、人足が集まっていた「番宿」など昔の街並みが復元されている。



(川渡し)

大井川の川渡しは、1601 年に徳川家康が、宿駅伝馬制度を設けて東海道を整備した時から、大井川や安倍川など 6 つの川には橋を架けず、徒歩通行とされた。そのため増水時には水が引くまで何日も足止めされた。

川越しの管理は初めは代官の役目だったが、やがて川会所制度へ変わっていった。ここでは川会所で川札を買い、川腰人足の肩や蓮台に乗って川を渡った。川札の値段は、毎日川幅と深さを測って決められた。川越人足は初めの頃は島田、金谷で各々 350 人だが、幕末ころには島田で 650 人を超す人がいたという。

(東海道中膝栗毛)

十辺舎一九「東海道中膝栗毛」は、1802年(享和2年)の出版である。それまでの大阪中心の元禄文化に代わり、江戸の町人文化が最盛期を迎える文化文政の時代の直前である。弥次郎兵衛(弥次さん)と北八(北さん)が身を持ち崩した挙句に江戸から東海道を西へ下って伊勢参りする道中記である。「膝栗毛」とは、栗色の馬の代わりに自分の足を使って歩く旅行のことをいい、十辺舎一九は、この本を書くために実際に東海道を歩いたともいわれている。

当時お伊勢参りが庶民の流行だったので、この本は広く読まれた。特に当時流行の狂歌がちりばめられたうえに、行く先々で女あさり、悪事、いたずらが繰り返され、失敗談が面白おかしく描かれてベストセラー一本になったという。

(偽侍を演じ人足賃を値切ろうとするが、ばれる)

島田では、偽侍を演じて川渡しの人足賃を値切ろうとしたがばれてしまう話。旅行中は町人でも護身用に脇差を指していた。武士の場合、川越えは公定料金の割安な値段で渡ることができた。そこで弥次さんは、刀は持っていなかったがその袋だけがあったので、北さんを従者にして偽侍になって人足賃を値切ることにした。しかし、川会所の番頭から荷物の量、侍の人数などをあれこれ聞かれるうちに、答えが詰まってしまう。その挙句、刀の袋だけで中身がなかったために、いつの間にか、地面にあたった刀袋の先端が曲がってしまい偽侍がばれてしまった。

東海道中膝栗毛では、これを狂歌に詠んでいる、

「出来合いのなまくら武士のしるしとて 刀の先の折れて恥づかし」

(間に合わせの先の折れたなまくら刀となまくら武士がはづかしいとの掛け合い)

まことに他愛のない話である。



川会所

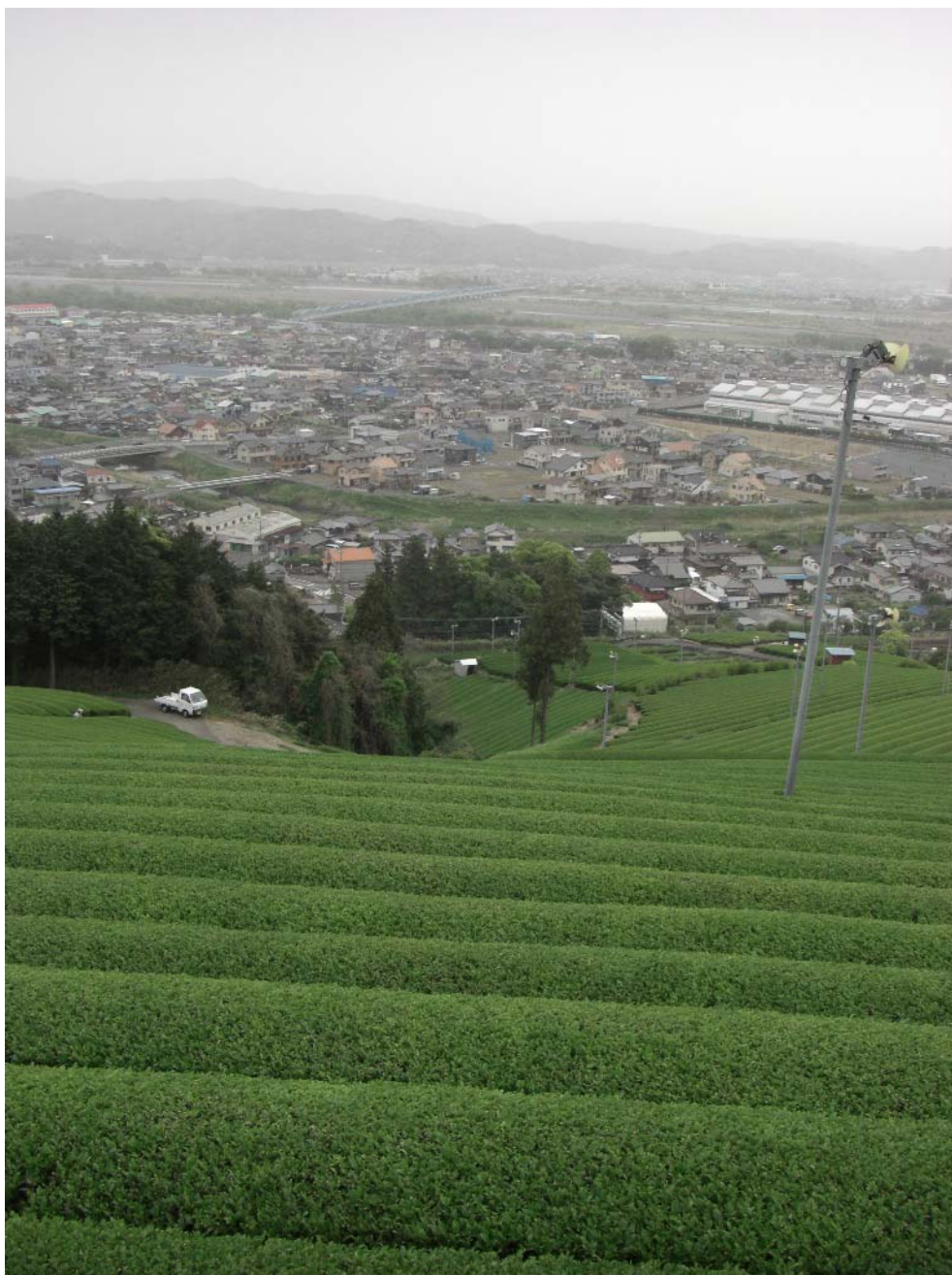


番宿



31 金谷	徳川家臣団と士族授産	2011 年 5 月 3 日
-------	------------	----------------

島田宿を出て大井川を超すと金谷へ入る。すぐ背後に広がる牧の原台地と大井川の間にへばりついた町だ。その牧の原台地はお茶の大生産地である。今ではSLが走る大井川鉄道の始発駅と言った方がわかりやすいかもしれない。我々が着いた日は春の嵐で黄砂が俟って、景色はぼんやりし、呼吸もやや息苦しかった。



1868 年（慶応 4 年）4 月に皇女和宮や篤姫らが犬奥を去ると、江戸の役宅から退去を命ぜられた旧幕臣たちも、その多くが無禄の難民として海路で静岡へ移住せざるを得なかった。

しかし 70 万石に減らされた静岡藩に任官できたものはわずかで、大部分の人々は、先の展望もないまま家族と一緒に駿河や遠江へ移り住んだ。移住した旧幕臣たちの生活は困窮を極めたようで、みかねた山岡鉄舟や勝海舟らの音頭取りで各地で帰農や開墾などの士族授産事業が始まった。

その代表的事例の一人に、当初は徳川家達（いえさと）の護衛、次いで久能山警備を担当した「新番組」の隊長だった中條景昭（なかじょうかげあき）がいた。彼は牧の原のお茶園開拓の先駆者である。また、この時、富士山がある東部方面の愛鷹山麓や富士南麓の開拓も同時に始まった。

1869 年 7 月、版籍奉還により「新番組」が解体されて藩から牧の原開墾を命じられ、新番組の隊長中條景昭は、約 240 名の無禄の移住氏族を率いて入植した。翌年には約 80 名の元彰義隊の武士も加わり、合計約 300 名の士族に膨れたといわれている。

当時横浜港からの主要な輸出商品の一つがお茶だったことから、勝らは茶畑開墾を勧めた。旧幕臣たちは、慣れない農作業と、住居、食料なども自活せねばならない悪条件下で始めたため、その開拓事業は苦難の連続だった。士族は中條組、大草組、榊原組、久保組などに分かれて競い合うように茶畑開墾にあたった。

牧の原台地はそれまで地元農民すら顧みない荒れた台地だった。大井川が堆積した砂礫土で何よりも水利がなかった。いったん旱魃になると対応するすべもなかったといわれている。

お茶は木を植えてから収穫は 6, 7 年後になるため、牧の原でも、お茶の収穫ができるようになったのは 1978 年頃からだった。その間、中條たちは極貧生活を余儀なくされ、体を壊す者などが続出して開拓から逃げ出す者も多かったが、中條たちは、幕臣の誇りと覚悟を支えに頑張り続けたという。少額だったが藩から支給された開墾手当や家禄廃止に伴う奉還金も彼らの苦勞を支えたものの一つだった。

ところで、この士族の開墾にはもう一つ大きな力があつた。明治維新後に、大井川の渡船が許可されて、1871 年には川越人足の転業が始まった。彼らも開墾事業に向かうことになって、あるものは士族と一緒に、またあるものは自分たちだけで開墾に入るようになったのである。

開拓は決して順調ではなくて、茶園経営を成功させて規模拡大や製茶技術改良を行う者もいる一方、借金を増やして失敗する者も多く、士族間の格差、分裂

も進んだ。1878年に約200人いた士族が5年後には約100人に半減し、その後もその数は減少し、撤退する士族の土地は資金を融通していた地元有力者が買い取り、大茶園として再生させるなどした。

紆余曲折は多かったが、美しいお茶畑の中を歩いていると、中条景昭らの開拓努力がなければ、現在の牧の原台地の隆盛はなかっただろうと思われる。



32 日坂	中山茶	2011 年 5 月 3 日
-------	-----	----------------

金谷坂、菊川坂、小夜の中山峠と陰しい山道が続く。しかしその両側にはよく人の手が入った美しいお茶畑が広がっている。時は 5 月、新茶の真っ最中で、どこの畑にも、手摘みをする人、ご夫婦二人で向かい合って機械で収穫する人、一人で機械の上に乗ってお茶の木にまたがって少しずつ動く機械で収穫する人がいる。このお茶は「中山茶」と呼ばれる。



お茶は、戦国時代には万病に効く薬で、戦で武将が使う重要な飲み物とされ、武士以外の人にはめったに飲むことはできなかった。江戸時代になっても、将軍家光は宇治の新茶を江戸に届ける行列を「お茶壺道中」と呼んで特別扱いしたほどだった。お茶壺に大名行列並みの権威付けをして人々にお茶壺に頭を下げさせ。一旦追い越されたら二度と抜き返させないことにした。

これを皮肉った戯れ歌が「ずいずいずっころばし」である。ある家でズイキのごまみそ和えを作っていると、お茶壺道中が来た。急いで戸を閉めて、子供たちには通り過ぎたら遊んでもいいと言って、家中の人が奥へ隠れた。父や母が呼んでも、ネズミがお米をかじっても、動いても声を出してもいけない。でもこっそり抜け出して井戸の周りで遊んでお茶碗を割った子がいる。それは誰だ。

経済的に見て意義をもつお茶の生産の歴史は、横浜開港から始まる。静岡でもお茶が栽培されたのは大井川上流の川根や安倍川沿いの一部で、徳川家康公らがたしなむ程度だった。しかし、横浜開港で貿易が始まると、お茶はシルクに次ぐ主力商品になって、主産地静岡を中心に全国でお茶生産が始まった。

貿易の当初はイギリスが多かったが、間もなくアメリカが大輸入国になった。イギリスでも当初は緑茶中心だったが、1820 年ころから紅茶に変わった。アメリカでは、英の東インド会社の茶の専売やボストン・テイ・パーティーで独立戦争が始まった経緯もあって、コーヒーを好み、お茶も紅茶でなく緑茶だった。テイといえば緑茶で、おもに労働者階級の人々がミルクや砂糖を入れて飲んだ。1910 年ころから紅茶がよく飲まれるようになって、緑茶需要が大きく減少した。アメリカの緑茶市場の収縮に伴い、アフリカや中近東などの市場開拓や紅茶生産にも努力したが、緑茶挽回には役立たず、結局内需拡大しかなかった。

日本人が飲むお茶は、明治以降、手間をかけずに日向で乾燥させた番茶が中心だったが、輸出が増えると徐々に煎茶が好まれるように変わった。1918 年頃にはその内需が輸出を上まわるようになった。1890 年頃は年間一人当たり消費量が 100g だったものが、大正期に 200g、昭和前期には 400g に達した。戦後もお茶の輸出低迷は変わらなかったが、内需も 70 年頃に一人当たり年間 800g で伸びが止まり、内外需ともに需要が停滞した。しかし、80 年代後半にボトルティーが開発されると、お茶の消費拡大が始まり 90 年頃に 1kg を越すようになった。今日では、農薬問題や国産品の高品質を求める動きなどから国産茶の需要は更に拡大すると予測されている。

33 掛川	イギリス外交官襲撃事件	2011 年 5 月 6 日
-------	-------------	----------------

GW を最大限に利用してウォーキングをしている。仕事の関係もあって、私とサンチョはもともと土曜、日曜、祝日に歩くというのが約束だった。それに加えて、第 1 に暑くなる前に静岡県を抜けよう、第 2 に千円高速が終了するまでに少しでも名古屋へ近づいておきたい、とも私は考えていた。

裏話を一つ。宇津ノ谷峠越えの時は、峠の岡部宿でその日の行程を終えて、バスで静岡へ戻り、次回は掛川からバスで岡部宿まで行ってからウォーキングを開始した。しかし、次の、小夜の中山越えの時は、峠にある日坂宿には思うようなバス便がなかった。だから、小夜の中山越えは金谷から上って掛川へ着くまで一日の行程で完結させねばならなかった。そのため島田～金谷間は後日歩くことにした。

日程は変えることができたが、思うように変えることができないのは、サンチョの膝の具合である。小夜の中山越えは 14km の距離だが、山や坂が多くて、サンチョの膝には相当厳しい。そのためにサンチョがとった作戦は、休み休み歩くのは当然として、道中のあちこちにある 100 円、200 円で置いてあるミカンや野菜などの無人販売の利用や途中の商店でモンペや手袋などを探す楽しみで気分転換を図ることだった。

今日は掛川から袋井までを歩く。その距離は約 10km。平坦な道なので、ここが終わってから前に残した島田～金谷間も歩く予定である。

GW の最中で、前回の大渋滞に懲りたので、サンチョの提案で新幹線で往復することになった。それにしても、サンチョは痛む膝をだましだましだが、よく歩いている。私、ドンキは帰りの電車で酒が飲めるのが楽しみである。



1867年(慶応3年)5月27日、英外交官アーネスト・サトウは、ワーグマンらと一緒に大阪から江戸へ帰る途中、掛川で例幣使(れいへいし。帝が日光へ進物を届けるために派遣した使者のことで、ここでは日光から京都へ帰る途中だった。)12名の襲撃を受けた。幸いにも一人のけが人もなかったが、この事件で例幣使側は2名死刑、4名遠島の処分を受けた。

サトウが来日した1863年ころに比べれば、外国人殺傷事件は減少したが、この事件はそれでもまだまだ油断が許される状況ではないことを改めて教えるものだった。サトウの上司にあたるイギリス公使ハリー・パークスは、日本人がなぜかくも外国人を忌み嫌うのか、について次のように考察した。

第1に、織豊時代から続いている邪宗門に対する強い警戒心

第2に、貿易開始で日本商品の過剰な流出、金貨流出により国内の物資不足、物価騰貴で生活不安が発生

第3に、外国人による日本古来の法が侵される不安

第4に、植民地化と幕藩体制が急速に衰退する中で新たな政治体制に外国が加担するかもしれない不安

これらの動向は全国へ蔓延し、外国人に対するテロは、江戸や京都などの政治中枢、大阪や横浜のような経済中枢に限らず、掛川のような田舎でもちょっとしたきっかけですぐに火を噴いた。



71



「十返舎一九」(三代豊国、東大文学部国文学研究室蔵)

「東海道中膝栗毛」は、弥次さんと北さんの二人の旅の出来事、見聞、感想を書きつづったものである。この著作には、次の三つの特徴がある。①旅先での名物、名所、旧跡を紹介②旅の非日常性の中で、羽目を外した人が考え行動することを面白おかしく紹介③著者の感想、意見の開陳である。

特にこの著作を面白くさせているのが、②の羽目外しである。非日常性の中で遭遇する（ア）食欲、色気（イ）弱い者いじめ（ウ）いたずら（エ）意気地なしが原因で事件に遭遇しその都度引き起こす失敗談が面白い。そして、各々の事件の終わりに詠まれる狂歌は、とても冷静でシニカルなものが多い。多分、著者の一九の意見（感想）とみてよさそうである。

（お伊勢信仰）

伊勢神宮には天照大御神を祀る皇大神宮＝内宮と豊受大御神を祀る外宮がある。前者は国を作った神様で天皇家の先祖、後者は五穀豊穡の神様という。伊勢に参宮するということはこの神様をお参りすることになる。神宮は国内に25か所（皇室の祖先を祀るもの6社、特定の天皇を祀るもの13社、その他6社）あるが、神宮の中の神宮は伊勢神宮一つという。中世まで長い間、伊勢神宮へ一般人が参宮することは禁止されていたが、室町幕府以降、まず将軍家、次いで大名の参宮が許可され、江戸期に庶民も許可された。そういえば土山宿（滋賀県）へ行った時、垂水斎王頓宮跡（たるみのさいおうとんぐう）があり、平安時代に天皇が即位するたびに斎王に選ばれた皇女が伊勢神宮へ参拝する習わしがあ

って、途中でみそぎをする場所があった。だから伊勢神宮はもともと天皇家専用の神社で一般人を排除してきた。しかし、ある時から五穀豊穰という経済活動が天皇家を支えており、経済活動を実際に担う庶民もお参りさせることで相互理解を深めて天皇家を一層盛んなものにできることに気付いた人がいたようだ。だから、お伊勢信仰は、祀られている神様をお参りするという「巡礼目的としてのお伊勢参り」と弥次喜多がそうだったように「旅としてのお伊勢参り」の二つがあったとみられる。

（伊勢講）

この「お伊勢信仰」を広げたのが「御師」と呼ばれた旅行業者で、彼らが考え出したのが「講」である。伊勢講は次のようなシステムである。定期的に講員の家に集合。講元は、前日から正装して講員から証米を集め、当日は床の間に「天照大御神」の紙を下げてお供えを祀る。講員が集合すると、全員で祈願し、その後宴会となってお供え品も食べる。この歓談中に代参する人や日程、経費を決定した。宴会が終わると、参加者から費用を集めた。要するに、当初には伊勢講は旅費の経済的問題を解決する手段として考え出されたものだ。しかし、講は次第にその役割を広げ始めた。まず、当初は有志のグループで講を作ったが、次第に村人全員が強制加入されるように変わった。また代参も希望者制だったものが、だんだん持ち回りで半強制的なものになった。さらに、若者へも講が影響するようになる。お伊勢参りに行っていない人は村の成員ではないとか大人として認めないといった使われ方が始まったのである。

こうなると、「お伊勢参り」が次第に村の成人になるための通過儀礼の役割を果たすようになった。その結果、若者に正規の旅費は用意できないので、無銭旅行の形をとった「抜け参り」が始まる。この無銭旅行が増えたために「お伊勢参り」が江戸後期から爆発的に増えたのだらうと多くの歴史家は見ている。

お伊勢参りは今日でも盛んである。2010 年が 882 万人である。遷宮の年をピークにして増減を繰り返している。遷宮というのは 20 年ごとに内宮と外宮の正殿を立て替えてその都度神様を移し替える儀式をいう。人は不安を感じるとしつかりしたよりどころになるものに寄り掛かろうとする。一部の右翼連中とマスコミの操作で天皇制がこの国で生きながらえ、その天皇家の祖先を祀る伊勢神宮が人々で賑わうのは、この国の人々の生活に不安が多くてよりどころを探していることの反映なのだろう。

35 磐田	アユ解禁	2011 年 5 月 14 日
-------	------	-----------------

今日は袋井から磐田を経て天竜川までの約 12km を歩く予定だった。ところが、サンチョが朝からとても元気がいい。見附宿(磐田)を楽しく歩いたところで、サンチョが今日は天竜川を越えよう、と言い出した。

天竜川の土手へ着くと、強い西風が吹きまくっていた。体ごと吹き飛ばされそうな強風の中を、天竜川を越えて中野町(浜松市)へ入った。すると、サンチョがここは浜松市の一部と聞いて、すぐに浜松宿へ着けると思ったらしい。まだ 8km もあるがと言うと、たった 2 時間ね、と強気である。こうして浜松駅まで歩くことになり、行程は 21km にもなった。これまでの最長記録である。最後はとてもきつかった。



旧見附小学校(磐田市)

M8 年に建設された木造 5 階建ての洋風の建物である。説明板に日本最古とか偽木造などのおどろおどろしい言葉もあったが、要するに学校である。ただ学制発布は M5 年 8 月で、翌年には一部改正されるが、フランスの学制を真似て作られたらしく、全国を 7 大学区に分けて、一大学区に 32 中学区(239 校)、一中学校区に 219 小学校区(42,451 校)があった。それからみれば珍しくもなんともないが、150 年たって建物が健在というのはうれ



この天竜川は、昔からアユ釣りが盛んな川である。私のアユ釣りも、伊豆の狩野川とこの天竜川で教えてもらって育った。この川が間もなくアユ釣り解禁になる。来週の5/20（金）興津川が解禁、5/22（日）狩野川が解禁、6/1（水）この天竜川を始め静岡県と神奈川県ほとんどの川でアユ釣りが解禁になる。去年10月に禁漁になって以来、約半年ぶりにアユと対面できる。また、各地に散っていたアユ釣り師たちとも会える時である。だから、その日を首を長くして待っていたアユ釣り師たちにとって解禁日はお祭りだ。

近年、アユ漁獲量が激減している。H3年の1.8万tをピークに年々下げてH20年には3千tまで落ち込んでいる。これはプロの職漁師だけでなく、我々遊漁者のそれも含んだデータである。その原因は、冷水病の蔓延と天然ものの溯上激減、川鵜の食害、ブラックバス等の外来魚による食害、ダムや堰の乱立だろうと指摘されている。

楽しみでアユ釣りをしている我々は、タイツや足袋などの釣り道具の消毒をまめにして冷水病を広げないこと、川鵜や外来魚の駆除にこれまで以上に協力する必要がある。それだけでなく、今や各々の釣りスタイルについてももう一度基礎に戻って見直してみることが必要になっていると思う。

私の釣りは、1653年、当時すでに乱獲でマスの絶滅を心配しながら「釣魚大全」を書いたアイザック・ウオールトンのスタイルを模範にしてきた。ウオールトンのスタイルは、釣り師は職漁師ではないので、売るために釣らないし、自分が食べる分だけを釣るべきだ、そして静かで落ち着いた気持でいるべきことを学べ、というものである。

「釣魚大全」というと釣りの知識を幅広く提供する本のように見えるが、実はそうではない。その原題は「完全なる釣り人、あるいは瞑想者のレクリエーション」である。血なまぐさい市民革命の最中に出版されて、これまでの350年の間に385版を重ね、今なお世界中の人々に読まれている本である。

銃声を布団の中で聞きつつ、平和になったら釣りへ行くぞ、と密かに願う人々に読み継がれてきたのだろう。マスの習性、釣り方、釣り餌、仕掛けなどをこと細かく書きつづられている。

こうしたレクリエーションのための釣りも、魚がいなくなつては成り立たない。だから、節度のない食欲は、魚を奪うだけでなく、魚釣りの楽しみまでも奪ってしまう、といえる。今の2010年代の資本主義の爛熟期にあたって、改めてこの本に光を当てて見るべき時になっているように思われる。

36 袋井	東海道中膝栗毛を読む(2)	2011 年 5 月 14 日
-------	---------------	-----------------

袋井市中に、日本のど真ん中という看板が出ている。東海道 53 次で 27 番目の宿場だから、真ん中と言うらしい。一体それがどうしたの、と思う。実際に町の人に聞いても、笑っているだけで何も出てこない。要するに、誰かが決めたキャッチコピーが独り歩きして町の紹介までつながっていないのである。軽薄なのである。「東海道中膝栗毛」で十辺舎一九は、天竜川へ来た時に、そこがちょうど距離でみると真ん中で、町名も中野町だったことから、プロはこうして「ど真ん中」を PR するという実例を見せてくれている。前々回の袋井宿で取り上げた「膝栗毛」の読み方に沿って見てみたい。



「天竜川橋」。上下一車線で狭いが、「暴れ天竜」にふさわしく、もの凄い重量感がある頑丈なトラス橋である。この橋は昭和 8 年に建設された。左側のすぐ上流に昭和 48 年に上下 2 車線の「新天竜川橋」が建設され、次いで、平成 20 年に、さらに上流側に 3 番目の新新天竜川橋（4 車線）が建設されて、今の道路は上下各 4 車線となっている。この古い橋は静岡県の土木遺産になっていると聞いた。

弥次さんと北さんは、天竜川を渡し船で越す。たまたま穏やかな日和だったが、名高い「暴れ天竜」の評判を思い出して、船中で暴れる竜尽くしの一句を詠む。

「水上は雲より出でて鱗ほど 浪の逆巻く天竜の川」

川を渡ると、中野町へ入る。そこは江戸から 60 里、京から 60 里で東海道の振り分けにあたると言うので「中ノ町」とも呼ばれている。距離でみると東海道のだ真ん中にあたり、天竜川の渡しでいつも混んでいたらしい。それを江戸吉原に並ぶ賑わいになぞらえて、一句詠む。

「傾城の道中ならで草履がけ 茶屋に絶えぬ中の町客」

天竜川を越す際に、水、雲、鱗、浪、逆巻くなどの竜尽くしの歌を詠んで、我々に「暴れ天竜」のすごさを彷彿とさせる。その天竜川の川渡しのために混雑する中野町を江戸新吉原の中心地である仲ノ町に匹敵する賑わいにたとえて、中野町が賑わう様子を詠んでいる。

私たちは、一九によって、天竜川という名所を名所としてはっきり理解できるし、その名所が、川渡しの東海道の真ん中にある中野町にあり、江戸新吉原の仲ノ町と同じように賑わっているらしいと連想できるのである。

37 浜松	東海道中膝栗毛を読む(3)	2011 年 5 月 15 日
-------	---------------	-----------------

「東海道中膝栗毛」の読み方の話を続ける。

浜松の幽霊話、新居の渡しの蛇騒動、日坂の夜這い^{につさか}などの話を例にして詠む。



舞阪から新居までは、当時は海上一里半の今切の渡しである。その昔浜名湖は淡水湖だったが、1498 年の大地震で陸が切れて海とつながったといわれている。そこで今切という。5 月はちょうど潮干狩りのシーズンで、アサリとりがさかんに行われていた。

1（浜松） 気が小さくて意気地がなく、按摩の幽霊話で大騒ぎ

按摩を受けていると、階下で念仏講が始まった。按摩の話では、この念仏は首つり自殺した前のおかみさんを供養するもので、今でも時々幽霊が出る。特に今日のように雨がしょぼしょぼ降る夜には出そうだ、と言われて怖くなる。夜

中に小便をしたくて廊下の雨戸をあけて用を足そうとすると、庭先に白いものが浮かんいる。それ出た、といって大騒ぎすると、亭主が来て、よせ忘れた洗濯ものだという。

「幽霊と思いの他に洗濯の 襦袢ののりがこわく覚えた」

(念仏で幽霊の方が怖がるはずが、襦袢の糊が固く干し物がピンとして幽霊に見えて怖かった)

弥次・北は二人とも負けず嫌いでほら吹きだが、意気地がない。何事でも最後まで頑張る気構えはない。だから、按摩から幽霊話を聞いただけで、怖くなって、人々の物笑いの種にされる。それでも平気なのである。

2(新居) 渡し船の蛇騒動で、脇差しが竹光だとばれる

新居の渡しで船で、蛇使いの蛇が逃げ出して大騒ぎになる。北さんが持っていた脇差しで押さえて、海へ放り出した時、手が滑って刀ごと投げ捨ててしまう。蛇は逃げたが、刀は竹光だったので、波にゆらゆら浮かんでいる。

「舞坂をのり出したる今切と またたく暇も新居にぞ着く」

(舞坂を出発し、今切へ乗りだったが、またたく暇もあらずに新居へ着いた)

「竹べらをすててしまいし男ぶり ごくつぶしとはもう言われまい」

(竹光を捨てて男を下げたが、竹べらはないので役立たずとは言われまい)

あわて者である。文句も言うが、それが理屈が通っていないので、すぐにひっくり返される。竹光も簡単に見破られてやり込められるが、竹光を捨てたのだから、もう穀つぶしといわれることもないぞ、と居直る。この二人の平衡感覚は抜群で、あるところまでこと進むと、きっと片方が「もうやめときなよ」と言って止めにかかる。

3(掛川) 相手を弱者とみて盲人にいたずらし、最後には茶代 64 文を払わされる。

盲人二人が川渡しで、若い方が兄弟子をおぶって渡ろうとしていたので、兄弟子になり済まして弥次さんがおぶられて渡ってしまう。これを見ていた北さんも、おぶられて渡ろうとしたが、途中でばれて、川の中へ放り出された。

「はまりけり目のなき人とあなどりし むくいは早き川の流れに」

濡れた着物を持ったまま先へ行くと、茶屋で先ほどの盲人たちが酒を飲んでいて。見えないことに悪乗りして、北さんはその酒を横取りして飲んでしまう。2本目が来ても同じことをすると、盲人ふたりが喧嘩を始め、代金を払わず出て行こうとした。それを見ていた子守女が北八が飲んだと言い出して、ばれてしまう。その挙句、酒代 64 文を払わせられた。

「することもなすこともみな足久保や 茶にしられたる人のしがなさ」

(することもなすことみな悪く出て、他人からもばかにされてみじめな気分だ)

旅の恥はかき捨て、というのが二人の旅のスタイル。どんなに男を下げようと、笑い物にされようと、次の宿へ向かう段になると、ケロッと忘れる。また、相手が弱者とみると、すぐに悪さを始めて、無責任に振る舞い、罪悪感、道徳心のかけらも感じさせない。

4(日坂宿) 夜這いで相手を間違える大失策

同宿した4人連れの巫女(霊媒師)のうちの若い女に、北さんはその夜、夜這いをかけると、間違えて婆さんを抱いてそのまま寝込んでしまう。そこへ弥次さんも夜這いをかけ、間違えて北さんに接吻してしまう。気付いてあわてた弥次さんは、隣に寝ていた婆さんの上に乗ってしまう。翌朝、弥次さんはその婆さんからお金の催促を受けてしまう。踏んだり蹴つたりの目にあって一句詠む。

「巫女ぞと思うてしのび喜多八に 口を寄せたることぞくやしき」

それでもおさまらずに、もう一句、

「干からびし姑の畑にひきかえて 水沢山の嫁が田ぞよき」

旅へ出た男たちは、今でもそうだろうが、色気と食い気で一杯である。さんざん女を抱き、御馳走でおなか満腹になっても飽きず、懲りない。誰もが弥次北のようである。ここではその女好きが中途半端なところがおかしい。

38 新居	新居関所	2011 年 6 月 4 日
-------	------	----------------

今日は新居～二川、約 7.5kmを歩く。

中間の白須賀宿を過ぎると、愛知県入りする。静岡県を縦断したことになる。長かった。今日も上天気である。

新居町を出発してしばらく行くと、松並木のある旧道だ。旧道からよく見えるのだが、並行して 500m 位海側に 1 号線、そのさらに海側の海岸に接するあたりに浜名バイパスがあり、この旧道を走る車は地元の人だけだ。気分良く歩ける。

しかし、白須賀宿を過ぎると、その 3 本の道路が一つに統合される。我々はその歩道を歩いている。ものすごい交通量である。周囲は今収穫時期を迎えた玉ねぎ畑があって、その間にスズキ自動車などの大きな工場がある。騒音と排ガスの中を歩くので、まったく不愉快だ。その上に、今日は暑い。

さて、千円高速がこの 6 月 19 日で終了することになった。民主政権に反対する人だけでなく、何人かの評論家の人々も、千円高速政策がマイカー利用促進し、フェリー、鉄道、トラックなどの既存産業の権益を脅かす、排ガスやガソリン利用自粛・エコ運動に水をかける、とヒステリックな反対運動を起こした。

私はそれでよいではないかと考えている。久しぶりに個々の市民が緊急経済対策の一つに直接参加できるではないか。また、市民が移動しやすくなって、観光地や各地の道の駅が繁盛すれば波及効果も大きいぞ、とも思う。だから、せっせと千円高速を利用させていただいた。

しかし、3・11の東日本大震災の被害者救済を最優先すべきで、千円高速終了もやむを得ない。東海道ウオークのほかに、アユ釣りも始まったので、これからどうするか、と考えながら東名高速で初夏の新居町へ向かった。

* * *

新居関所は、箱根の関所と並び、東海道の人の移動を厳しく取り締まる重要な場所だった。その主目的は「入り鉄砲に出女」の取り締まりで、江戸から大名の妻が密かに帰国しないか、密書を隠していないか、江戸で軍事活動を行う可能性がある鉄砲の出入りがないか、をチェックした。

箱根は、周辺に配置された根府川や仙石原などの協関所と連携して、箱根山を監視する「山の関所」で、江戸から上方へ向う「出女」の調べが厳しかったが、鉄砲改めはさほど厳しいものではなかった。

これに対して、新居は、浜名湖沿岸の村々と連携して湖上水運を監視する「海の関所」だった。箱根と違って、「出女」だけでなく、上りも下りも問わず往来する女性を厳しく審査した。鉄砲改めも厳しかったが、女性改めでは、禪尼、尼、比丘尼、髪切り、少女などに分類して各々の手形の発行元を厳密に定めて審査した。

しかし江戸中期を過ぎると、箱根も新居も関所の監視は次第に緩くなってきた。関所破りは死罪だが、抜け道がいくつもあったらしい。大勢の人々が行き来した伊勢参りでは、奉公人や女中が主人で無断で行う「抜け参り」が多くあって、彼女らは「間道」を使ったり、賄賂を渡して関所を通ったり、「藪入り」と称して道に迷ったふりをして見逃してもらう、などがあったようだ。



新居関所

関所は M2 年に廃止されたが、その建物は小学校校舎、役場として昭和 26 年まで使われ続けてきた。その後何度か修理を繰り返し、平成 10 年に船会所、女改め長屋、大門、船着き場が再整備されて、関所の全体像を見ることができる今の遺跡となった。東海道中膝栗毛でも出てくるが、舞阪から船に乗った旅人は、全員がこの船着き場へ到着して、改めを受けた。

39 豊橋	三河弁	2011 年 6 月 11 日
-------	-----	-----------------

今日は二川(ふたがわ)から伊奈まで歩いた。約 12km。天候は、朝方は前夜から続いた大雨だったが次第に西から上がって、私たちが歩く 9 時ころには小雨、10 時過ぎには雨も上がって曇り空となった。

豊橋は私、ドンキが中高生時代を過ごした町である。だから、市内に入ると、懐かしい名前、建物、場所が次々に出てくる。あちこちに思い出が隠れている。そんな懐かしい町を歩きながら、そういえば最近「三河弁」も聞いていないなあ、と思う。

「東海道中膝栗毛」では愛知県の影が薄い。五十三次の中では二川～宮までが今の愛知県になるが、膝栗毛では全行程 13 日のうち 2 日、御油、赤坂、岡崎、宮の 4 宿が登場するにすぎない。織田、豊臣、徳川などそうそうたる偉人を輩出している割に、最近に至るまで、愛知県の影は薄い。

今でこそ名古屋圏という地域経済圏も確立されているが、こうなったのは 1960 年代の高度成長期以降に進んだ自動車産業を中心とするモノづくり立国政策による。それまでの長い間、愛知県は首都圏と関西圏の中間にあって、特色ある社会経済や文化を形成できずにいた「通過県」だったように思う。

だから、求心力を持たない愛知県は、昔から名古屋を中心とする尾張、岡崎を中心とする西三河、豊橋を中心とする東三河の 3 ブロック、あるいは東西三河を合わせた三河、尾張の 2 ブロックからなるといわれてきた。

影が薄いといえば、司馬遼太郎もそのように見ていたと思う。日本中を歩いたと豪語する彼の「街道をゆく」も、愛知県はなかなか登場しない空白地帯だった。最後の「濃尾参州記」でやっと出てくるが、途中で絶筆になってしまった。

* * *

方言について考えてみる。

方言分布でみると、愛知県は「みゃあ、みゃあの名古屋」と「じゃん、だら、りんの三河」に区分できる。細かく見れば三河も東西で少し違うがここでは無視する。さらに面白いことには、この三河弁が、隣接する静岡県西部の遠州弁とまたそっくりなのである。

(尾張弁)	(三河弁)	(遠州弁)	(標準語)
上がってちょうであー	上がっておくれん	上がとくれん	上がってください
来週テストだぎゃあー	来週テストだら	来週テストだら	来週テストだろう
そうだがや、食べやー	そうじゃん、食べりん	そうだら、食べりん	そうだろう、食べなさい

そうだな	そうだのん	そうだに	そうだねえ
どえらい難しい	ど難しい	ど難しい	すごく難しい
早よ行きゃあ	早く行きん	ちゃつと行かまい	早く行きなさい

日常的交流文化圏でみると、尾張では京都、三河では江戸に向いていたためではないかという人がある。私はそれに加えて、遠州は早くから家康公が居城にしたところだったし、その後の江戸時代には新居関所が吉田藩（豊橋）の管轄だったため、舞阪、浜松あたりまでは三河弁が相当広く使われていたのではないと思う。

面白い研究家もいて、三河の家康公が江戸を開いたのだから、江戸では三河弁が共通語で、家康公も江戸城では三河弁を使っていたのではないかと考えた人がいた。調査した結果では、江戸初期には三河武士を中心に武士間で三河弁が通用したかもしれない。しかし、江戸では全国から武士が集まり、政治上の公用語も上方語だったため、関東語に上方語がブレンドされた新しい言葉が生まれた、というのが結論で、家康公も公式の場では上方語を使っていたに違いがないという。東三河の方言の事例を追記する。

「のん、ほい」……………(ねえ、やあ)

・ほい、今日は暑いのん

「～だに」……………(～だよ)

・明日の天気は雨だに

・いいところだに、一緒においでん

「～じゃん」……………(～じゃないか)

・そんなことできにきまっとるじゃん、やめときん

・雨ふっとるじゃん、だで試合は中止になるら

「～だら」……………(～だろう)

・一生懸命やればできるだら、明日までにやっといでん

・これ綺麗だら、いいと思わん？

「～りん」……………(～しなさい)

・疲れとるだで、休みん

・渋滞しとるで、まっとりん

「～まい」……………(～しよう)

・気楽にやらまい、今日は貸切りだでね

・時間はまだあるで、もう一軒行かまい



東海道を走る市電(豊橋市)

40 赤坂	大橋屋	2011 年 6 月 26 日
-------	-----	-----------------

快晴。今日は伊奈～本宿を歩く。

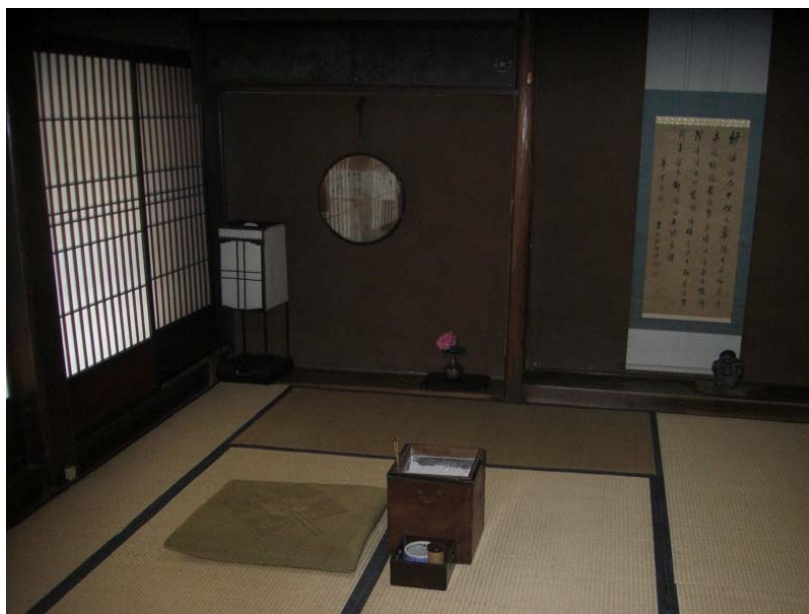
御油の松並木を過ぎると赤坂宿に入る。この町もとても東海道を大事に
して、至るところに案内板や地図がある。

町の中央近くに大橋屋がある。旅籠で、1716 年に建てられて、以降約 300
年を経た今日も現役の旅籠である。

連子の格子窓をもった 2 階建てで、軒先に古ぼけた「御宿所」と書かれた大
提灯を下げている。

中に入ると、広い土間、よく磨かれた板の間、絵巻物風の腰板がある千本
格子の襖、黒光りする階段、梁が縦横に走る高い天井、その途中には昔高
貴な人々が使ったらしい駕籠も格納されている。





日本人の旅の習慣をみてみる。

1867年5月18日、英公使館通訳のアーネスト・サトウは大阪から江戸へ向かって東海道を徒歩旅行した。その道中で、彼は日本人の旅の習慣を記録している。今でも通用しているような習慣である。

日本では旅籠代には食事、お茶、寝具、燃料、ろうそく、風呂の使用料などが含まれる。別勘定になるのは、酒とその肴代くらいなものだ。ヨーロッパのホテルでは、食事、酒、ろうそく、風呂代などは別に請求される。さらに、チップの習慣が日本にはない。誰もいただこうと思っていないから、こちらも払う必要がない。

日本では宿の客は朝早く出発するのが習わしだ。夜が明けない暗いうちに起きて、台所の流し台の上に吊るされたザルから一掴みの塩をつまんで急いで歯を磨く。石鹸はないが手と顔を洗い、朝食をかつ込んで、太陽が昇るや否やあるいはそれよりも早く道路へ出る。

そんなに朝早く出立するのは、その夜に泊まる次の宿場へ早く到着したいためである。泊り客全員に対して風呂が一つしかなく、水も一日一回入れ替えるだけなので、真っ先に良い部屋をとって一番風呂へ入ろうとするためだ。辺鄙な場所になると、風呂を毎日たてかえることもしない。

一日の旅程では、まずお昼休みがあつて一時間はかかる。次に少し身分が高い者になると、少なくとも午前と午後に一回ずつ足を止めて「お小休み」する。また、景色が良い所へ出ると、必ず立ち寄ってお茶を飲み、皿に盛られたお菓子や、漬物その他いろいろな食べ物を味わうことが昔からの旅の習慣になっている。

41 赤坂	宿駅伝馬制	2011 年 6 月 26 日
-------	-------	-----------------

暑い、35℃だという。

シャツやズボンはとっくに汗まみれだ。頭にかぶった帽子が熱気を閉じ込めてるようで、うっとうしい。でも帽子をとるわけにもいかず、タオルを頭にかぶせている。サンチヨは、日焼けを避けるというのでつば広帽子にやはりタオルを巻いて、前からみると、目しか見えない。だから、私以上に暑いらしい。

今朝 9 時に歩きだして、各々 30 分に 1 本くらいの見当で水を飲んでいいる。飲んでも飲んでも暑い。暑いので水を飲む。発汗で体力の消耗も激しくなる一方である。木陰を探して休み、また水を飲む。この繰り返しで、1 時間も歩くと顎が出てしまう。まだ 6 月下旬で梅雨の真っ最中なのに、この暑さでは夏の間のウォーキングは無理ということか。なんとか 12km を歩き切ったが、二人ともへとへとである。だからこの日は豊橋へ戻ってホテルで泊まることになった。

赤坂宿は 36 番目の宿場で、一つ手前の御油とは約 1.6km しか離れていない。松並木を抜け、小さな川を渡るともう赤坂宿に入るくらいの近さだ。



馬で運ぶ運賃と人足賃について、赤坂～御油では荷物一頭 23 文(乗り掛けで人が乗った場合も同様)、から尻馬(荷なしで人だけを乗せる場合)16 文、人足一人当たり 12 文。赤坂～藤川では荷物 1 頭 107 文、乗り掛けの場合も同様)、から尻馬 68 文、人足 51 文。木戸賃は主人が 35 文、召使い 17 文、馬 1 頭 35 文と書いてある。

東海道の宿駅伝馬制について。

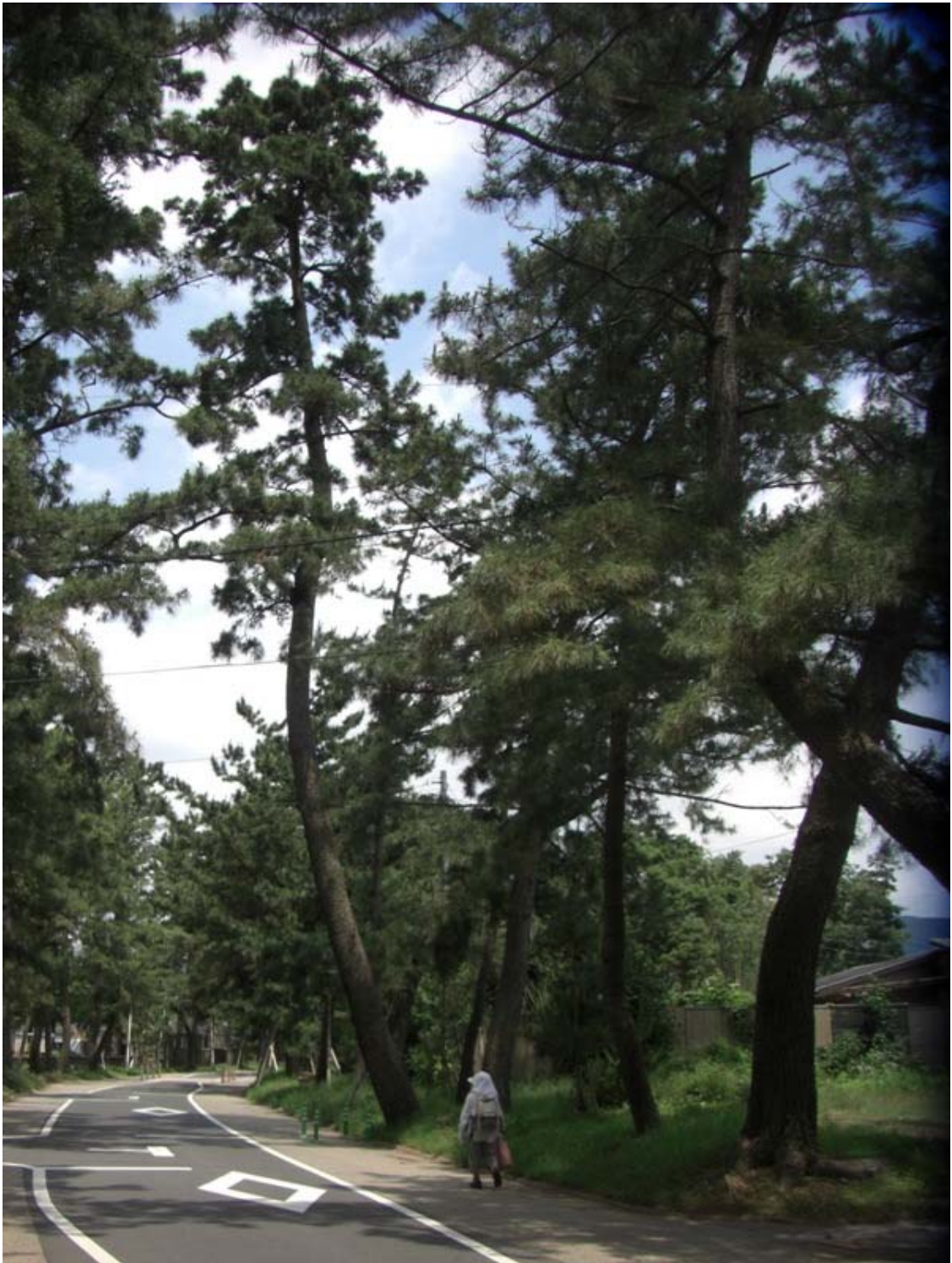
家康公は、1601 年、東海道に 53 か所の宿場を設けて一宿ごとに物資をリレーして運ぶ「宿駅伝馬制度」を定めた。この制度は、手紙や貨物を目的地へ届けるのに、同じ人馬ででなく宿場ごとに人馬を交代して運ぶようにしたものである。だから、江戸から京都まで荷物を運ぶには、53 回の継ぎ換えが必要になり、そこから「53 次」という名称も生まれた。

この荷物の積み替えのため、各宿には問屋場があり、人馬の手配と継飛脚の手配が行われた。東海道の場合、各宿場には人馬それぞれ 100 人、100 匹が置かれた（中山道では 50、その他各 25）。宿場ではこうした負担をしながら、他方で年貢免除、旅人から宿泊費や人馬による有料運搬の特権を得ていた。

宿場に置かれた主な機能

- ・「木戸、見附」・・・宿場入口を示す施設で、大名行列ではここまで出迎え見送りがされた。
- ・「本陣、脇本陣」・・・大名、武士、公家の宿泊休憩施設。脇本陣は空室時には一般人も利用できた。
- ・旅籠・・・・・・・・・・一般旅人用の食事付きの宿
- ・木賃宿・・・・・・・・・・一般旅人用の食事なしの宿。自炊可で、自炊時の薪の代金=木賃をとったので木賃宿とも呼ばれた。
- ・お茶屋・・・・・・・・・・一般旅人用の休憩施設で、お茶、食事を提供。水だけなら座っても無料

江戸～京都は約 500 k m、53 宿場があるので、宿駅間は平均 9km。この御油～赤坂間だけは距離が短く客の奪い合いがあったようで、近距離ゆえに、江戸行きでは藤川の馬は赤坂を通り越して御油で継ぎ立てをした。逆に京都行きでは吉田の馬は御油を通り越して赤坂で継ぎ立てをするよう特別な規定があった。



42 岡崎	三河武士	2011 年 7 月 2 日
-------	------	----------------

今日は、岡崎～知立(ちりゅう)を歩く予定だった。しかし、歩いている途中、突然ジンマシンが発症し、駆け込んだ病院でドクターストップが出されて、やむを得ず、新城で止まってしまった。

今年は早々と九州南部では梅雨明けしたらしい。関東、東海も梅雨明け宣言はまだだが、連日、晴れが続き、蒸し暑い。今日も朝から好天で、朝 9 時にスタートするときにはすでに気温は 29℃。

有名な岡崎 27 曲がりとは今回省略して、岡崎城から 1 号線へ出る。架け替え工事の矢作橋を渡って東海道へ入るが、しばらくするとまた 1 号線に合流する。その歩道を歩く。車道には土曜日だが、貨物を満載したトラックやワンボックス車が轟音と共に走り抜ける。沿道には車の部品を製造する工場が続き、油まみれの工員さんたちがせわしく働いている。1 週間前に藤川あたりを歩いた時にはさほどには感じなかったが、今日は工場に活気を感じられる。長く続いた不景気だったが、次第に、自動車の生産が上向いて、自動車の裾野産業にも元気が出てきたのだろう。

安城市に入り、1 号線から東海道が分かれる交差点で、小休止した。とにかく水ばかり飲む。持ってきたパンを食べながら、水を飲む。しばらく歩いていると、顔がむやみにかゆくなる。次に頭もかゆくなり、体中が熱いし、むくみを感じ始めた。何だか変、と思って松の根もとに座って、サンチョに診てもらうと、ジンマシンが大発生したらしい。

近くのお店の人に聞くと、病院が近所にあるという。正午 5 分前だったが、診察してもらう。やはりジンマシンの診断。そのアレルギーの原因は小 1 時間ほど前に食べたクリームパンの中の卵ではないかとお見立てで、さっそく注射していただき、次第にかゆみも薄らぎ、熱も下がり始める。そのお医者さんが、今日はウォーキングは中止して静かにして体を休めなさい、という。

そのため、ウォークは中止して、最寄り駅の新城駅へ向かい、そのまま豊橋の宿へもどった。



岡崎城の家康像

三河武士には、勇敢、頑固、忍耐力があつて主君のためには命を惜しまない武士のイメージがある。しかし少し調べると、これが徳川一族が作り出したフィクションだったのではないかと思うようになる。「三河武士」といえども「武士の子」で武士道に生涯をささげた武士一般と異なるところはないのに、「三河武士」は特別だぞという演出をし、結果的に家康公への忠誠力を高めさせることに成功しているように見える。「三河武士」という言葉には、そうした武士を家来にした家康公の人心把握力のすごさを垣間見る思いがする。今風に言えば、組織力を最大に発揮させるノウハウを見るのである。

「三河武士」という言葉は幕末に編纂された「徳川実記」に登場する用語で、昔からあった言葉ではない。それによれば、家康公が秀吉により、関東へ移封されたときに上級家臣団のほとんどを占めたのが代々徳川家に仕えた三河出身の武士だったことから、その徳川一門と譜代を指す言葉である。

もともと家康公自身に組織の構成、運営に相当な見識があつたようだ。秀吉から徳川の宝は何か、と聞かれたとき、家康公が、自分は三河の田舎者で珍しいものは何も持っていないが、命を惜しまない三河武士 500 騎ほどの宝物がある、と答えたという。組織の長が、部下の功績をきちんと評価し、その武士たちの権益を保証するといつて、今風に言えば彼は「家康ブランド」を作り上げたのである。これに対して、武士側からは、この人についていけば道が開けるという夢がうまれるのであり、「家康ブランド」への信頼が作られたのである

家康公が組織を大切に考える方をするようになった背景には、彼の育ち方が強く影響しているように思われる。昔の三河は、東の今川義元と、西の織田信秀（信長の父）に挟まれて、家康が 7 歳の時に父・弘忠が家臣に暗殺されて、今川が三河を支配し、家康は人質にされて駿府へ移された。19 歳の時に信長が桶狭間で今川を破るまで、家康にはその人質状態が続いた。

長く続いた人質状況下で、家康は主家も当てにできず、自分自身で防衛をしなければならなかったために、自分が不利な状況に陥ってもそれを隠し立てせず、地縁、血縁の結びつきを強くし大事にするようになったのではないかと想像される。「三河武士」という言葉も、身内を大事にし出身地を大切にした家康の意思を表したものと言えるのではないだろうか。



家康の顰(しかみ)像

今川亡き後の今川領は、大井川を境に東の駿河国が武田、西の遠江国が徳川領に分割された。しかし、ほどなく武田信玄が天竜川まで侵攻したので、これを阻止するため徳川・織田連合軍が三方ヶ原の合戦で戦った。しかし連合軍は大敗し、家康公は急きょ浜松所へ逃げ帰った。この敗北の苦渋に満ちた顔が「顰(しかみ)像」である。顰とは、しかめっ面と同義語で顔をしかめた様子を指す。家康公は自らを諷める意味もあって以降常に座右に置いていたらしい。家康公のような後に「紳君」と呼ばれるほどの英雄がこのような情けない顔を残している点もまた、彼が人心の把握とその采配にたけた人物だったことを表している。

43 知立	三河万歳	2011 年 7 月 3 日
-------	------	----------------

昨日のジンマンシンも無事治まって、かゆみもむくみも熱っぽさもなくなった。しかし、スタートの 9 時にすでに 30℃。相変わらずの暑さで、昨日に比べて風もない。昨日のジンマシンを考えると、この暑さでぶり返す心配もある、だからいつまでも歩くのは体によくない。そこで 2 時間だけ歩くことにして 11 時ころで今日は終了と決めた。今日は新安城から鳴海を目指して歩く予定だったが、結局、知立(ちりゅう)の一つ先の富士松までしか歩けなかった。



東海道沿いに建ち今も営業中の古い建物(知立)



左の写真は再興された三河万歳(西宮市 HP から借用)。

安城、西尾、幸田は三河万歳の発祥地である。三河万歳は、これらの三河地方に伝わる伝統芸能で、もともとは正月に、家の繁盛と家族の健康を祈って太夫と才増の二人が舞う祝福芸だった。二人の万歳師が交わす滑稽な会話が、人々の笑いを誘い、それが福をもたらすと考えられてきた。

三河の万歳師たちは、徳川家の庇護のもとで、江戸の大名屋敷を訪れては上がり込んで芸を披露した。だから、万歳と言うと三河万歳を指し、主な演目に、「三河御殿万歳」、「神道三河万歳」、「三曲万歳」があった。

明治以降、幕府の後ろ盾がなくなると、万歳師は神道職に変わり、「天の岩戸開きの舞」など神道の色彩を強めていった。第2次大戦後は後継者もいなくなって衰退したが、昭和末期に伝統芸能の復活により再興された。

TVでよく見る漫才は、江戸時代の「三河万歳」が元祖である。明治時代に大阪で、三河万歳の胡弓、鼓、三味線を使った「三曲万歳」を改良した「万才」が始まった。これは落語の合間の添え物にすぎなかった。その後昭和時代になると、楽器も利用しない会話だけの「しゃべくり漫才」が登場し、エンタツやアチャコらの人気もあって、吉本興業ではこの芸能を「漫才」と名付けた。以降、漫才は大きく発展し、今日では季節も問わず慶事の有無も問わず、年中披露されるようになった。

44 鳴海	絞りの有松	2011 年 7 月 9 日
-------	-------	----------------

ピーカンの夏空である。今日は富士松から笠寺まで約 12km を歩く。豊明、前後、中京競馬場前、有松、左京山、鳴海を通って行く。それにしても名古屋というところは暑い。朝 9 時半、すでに 32℃である。有松に着いた正午頃には 36℃になった。

帽子をかぶり、タオルを巻いて、その上に折りたたみ傘をかけて歩いているが、強い日差しの中では汗が流れおちて、目にも入る。のどが渴くので 30 分ごとに水を飲む。自販機で冷えた水を飲むが、15 分もするとその水が温まる。沿道に自販機が多いので助かるが、その値段が水でも 100 円、120 円、130 円とバラバラだ。百円水にあたると、思わずラッキーと言いたくなる。

町の人々が一様にこの暑い最中に大変なことをやっているねと言い、他にウオーキングする人たちとも会わない。だから、本来は今ではウオーキングする時期ではないのだろうが、日程の都合上、我々は人々に笑われても歩く。



桶狭間の合戦は、1560 年の織田信長と今川義元の戦争である。大胆で密な奇襲作戦で挑んだ信長が奇跡的な勝利を納め、以降、畿内の主導権を得て天下統一の筋道をつけた戦いだった。当時の今川は、駿府に本拠地があって、遠江、三河を支配する東海の王で、室町幕府が危機に陥った時には駿河の今川がその後継者になると目されるほどの実力者だった。力の弱い者が強い者を倒す類の話が好きな司馬遼太郎は、力が弱かった信長の情報収集能力と目標を義元的首取りの一点に絞った戦術が功を奏したと述べている。義元的首を取った後、信長が直ちに全軍引き上げを命じて風のように戦場を立ち去って清州城へ戻ったのがよかった、というのである。



有松は、名古屋市の「町並み保存地区」指定の第1号である。三重の関宿、木曽の奈良井宿、妻籠宿などの「伝統的建築物群保存地区」の先駆けと聞いた。

有松は「絞りの里」として、昔から有名である。江戸時代初め、ここらは貧しい土地だったが、東海道を往来する旅人相手に土産物になればと言って、豊後出身の農民が故郷・豊後の括り絞りの技で手拭いを染めたことが始まりという。広重が街道の名産として紹介したのは、この辺りではこの「有松の絞り」と水口の干びょうだから、好評だったのだろう。

江戸時代に各地で農村工業が発達した。いろいろな産業部門もその周辺で発展し、これらが組み合わされて産業上の自給自足を目指す局地的経済圏も形成された。有松の絞りは局地的経済圏の成功例である。

45 宮	宮の渡し	2011 年 7 月 10 日
------	------	-----------------

梅雨明け 10 日というが、先週梅雨明けした東海地方は連日ピーカンが続いている。多分この先 1 週間も続くようだから、ことわざ通り 10 日程度は快晴が見込まれる。朝から湧き出した大きな入道雲を見ながら、今日は、9 時半から笠寺から宮の渡しまで約 5km を歩く。笠寺観音、読続(よびつぎ)、河岸、堀田、伝馬町を経て、11 時に宮へ到着した。愛知県の東海道を踏破したのである。



46 桑名	ながらがわかこうぜき 長良川河口堰	2011 年 9 月 30 日
-------	----------------------	-----------------

JR関西本線が名古屋を出てしばらくすると大きな川越えが始まる。手前から、木曽川、長良川、揖斐川である。「長島駅」を出て長良川を越そうとすると、下流側に十数個のお化けキノコのような巨大構造物が出現する。「長良川河口堰」である。1994 年竣工、1995 年運用開始以来すでに 16 年が経過しているが、今なお根強い反対運動にさらされている施設である。



この堰（せき）は桑名市長島町にあって、長良川の河口になる。桑名の「7 里の渡し」に立ってみると、前を流れる揖斐川の向こう側にお化けキノコが連なって見える。

堰の設置目的は、長良川の洪水防止と塩水の溯上防止、上水道・工業用水の供給とされている。若干の説明を加えると、長良川は上流にダムを造る適地がないので、川を浚渫して洪水を流化させるしかないが、川を掘り下げると伊勢湾の塩水が約 30 k m 位まで溯上しその間では上水道や農業用水が利用できなくな

る。そこで、塩水の溯上を止めて川を浚渫する（「治水」）するとともに、併せて名古屋市の上水道や知多半島の農業用水として「利水」することが目的、という。

反対運動側では、国交省の塩害と水需要想定が過大でもともと堰は不要なこと、堰の設置でアユやサツキマス、シジミが激減するなど自然破壊も発生、と考えて、速やかに堰を常時開放させよと主張している。

今年の夏、九州の川辺川へ行ってきた。川辺川は、巨アユの川・球磨川の上流に位置して長い間、ダム建設是非で町が二分されてきたが、民主党政権誕生でいち早くダム建設中止が決定した川だった。その最上流部の五木村で、ダム（構想）のおかげで道路網がよく整備されておりありがたいが、ダムができれば山奥の村らしさをなくしてしまい、釣人も溪流遊びの人も来なくなってしまうところだった、中止されてよかった、という声を聞いたばかりだった。

ダム反対運動はよく環境か開発かという対立軸で俎上に乗るが、長良川河口堰の巨大構造物を目の当たりにすると、この設置の是非を議論する場合の当事者は誰がふさわしいかと思う。従来型の河川管理者の国交省と付近の自治体や住民、魚組、企業だけの直接的利害関係者だけでは不十分のように思われる。長良川のような大河川で、川の役割を変えて川の景色まで変えてしまうような大改造は、税金を使う公共事業に対してもっと広い範囲でタックスペイヤーの総意を反映させる仕組みを作り改造の是非を決定していく必要があるように思う。

暑かった夏の間は一時中断していた東海道ウオークも秋になって再開し、いよいよ三重県入りで、名物「ハマグリ」を楽しみに桑名へ来たとたんに、お化けキノコを見せられて、ウオーキングも滅入った気分が始まった。



「七里の渡し」

鳥居の前は掘割になっていて、コンクリ護岸がここだけ切れている。前が揖斐川で、中洲の先が長良川になる。昔に比べると川の中州がずいぶん伸びており、名古屋の宮から出た昔の「七里の渡し」ルートはすっかり消失している。もっとも弥次北が通った頃の「渡し」も、木曾三川のいずれかが暴れ川になると、そのルートはずっと南の方を巻くコースに変わり、「十七里の渡し」位にもなったと書かれているので、完全消失したわけではないともいえる。

写真の鳥居はここまで来て初めて知ったことだが、お伊勢さんの一ノ鳥居だそうである。弥次喜多が示すように、関東や静岡方面からお伊勢参りに来る人々は宮で船に乗って桑名まで渡ってくる。すると、鳥居が伊勢はもうすぐという案内板のような役割をしたのだ。

47 桑名	時雨蛤(しぐれはまぐり)	2011 年 9 月 30 日
-------	--------------	-----------------

名古屋の宮に立ったのが 7 月 10 日で、以降、余りの暑さのために秋になるまでウォーキングを中断したが、最近めっきり秋らしい陽気になってきたので、約 2 ヶ月半ぶりに再開することになった。再開後初の今回は新幹線往復の 2 泊 3 日のウォーキングである。新横浜を朝 6:00 に発って名古屋乗り換えで桑名駅着は 8 時過ぎ。「七里の渡し」をスタートしたのは 8 時半だった。何と言うスピード感。

で、この日は四日市まで歩く。朝は明るい曇りだったが、天気予報では午後から雨で、気温が急激に下がるだろうと予想していた。早めの昼食を近鉄富田駅近くで済ませて、雨が降る前に着こうとして歩く。

我々が歩く旧東海道は昔通りの道幅で幅三間(約 5m)の道だから、車がすれ違うには狭い。狭いのだが、何と通勤利用で走る車が多いことか。並行して 1 号線があるのだからそちらを行けばよいのに、信号が少ないこの狭い道を通勤車が走り抜ける。



桑名は昔から蛤の産地で、「東海道中膝栗毛」でも「焼き蛤」が紹介されている。

弥次 「ハハハ、はまぐりをもつとくんなせへ」

女 「ハイハイ」、又 やきたてのはまぐりを大さらにもっていだす

弥次 「おまへのはまぐりなら、なおうまかろふ」、とおんなのしりをちょいとあたる

女 「オホホホ、だんなさまは、ようほたへてじや」

北八 「おれもほたへふよ」、とおなじくしりをつめりにかかれば

女 「コレよさんせ。すかぬ人さんじゃ」

北八 「どふでも、おいらをばやすくしやあがる」、とぶつぶつごとをいう
ふうちあたりのてらのかねがゴオン

（「東海道中膝栗毛」、五編上）

木曾三川の河口でとれる蛤は、豊かな砂地で育つため、昔から味がよくて薬効も多いと重宝がられてきた。現在でも桑名は蛤の産地である。

しかし、江戸時代の「焼き蛤」の本場は、実を言うと桑名から南へ下った富田や小向だった。弥次北が焼き蛤を食べたところも富田の茶店だった。その富田は今では四日市である。

さて、「焼き蛤」が富田の名物とすると、桑名の名物は何だったか。これもまた昔から「時雨蛤」と決まっていた。時雨蛤は「煮蛤」とも呼ばれて、焼き蛤同様、街道沿いの茶店で売られていた。焼き蛤はその場で焼いて食べられたが、煮蛤は保存食で土産用だった。元禄時代頃に煮蛤が「時雨煮」へ名前を変えたが、歴代将軍から始まり伊勢参りに来る庶民にも人気があったといわれている。

時雨蛤は佃煮とも違う作り方をする。時雨蛤は、生きている手剥きの蛤を刻み生姜の入った湯で湯通しし、煮汁をしっかりと切った上で特産のたまり醤油で炊いて作る。佃煮は湯通しのあとあまり水切りをせず醤油でたく。その時鮎を入れて照りを出している。だから、佃煮はべつとり、こってり味だが、時雨蛤は香り豊かでこくがある。それでも時雨蛤は大粒で味が濃いので、刻んでお茶漬けで食べるのが最もポピュラーで、炊き込みご飯やおにぎりの具にもよく合う。

48 四日市	ひなが おいわけ 日永の追分	2011 年 10 月 1 日
--------	-------------------	-----------------

四日市から庄野まで歩く予定だったが、調子に乗って亀山まで歩いた。秋の日差しが柔らかく、さわやかな風が絶えず吹く絶好のウォーキング日和である。日差しの中を歩けば少々暑い、木陰に入るとずっと汗も引いてゆく。

加佐登駅(庄野宿の最寄り駅)で昼ご飯を探したがない。やむを得ず、庄野宿へ行く。町の真ん中をまっすぐに道は伸びるが、人がいない。子供の声も聞こえず、お年寄りの姿もない。なんとか見つけた年寄りに話を聞くと、今日は小学校の運動会へみんな行っているのという。町に活気がない。人がいないだけでなく、昔のお店もほとんど閉店しているせいもある。この辺では商店はほとんど全滅状態である。この状態が進むと車に乗れないお年寄りには困るだろうと思う。

結局、我々は、町はずれのコンビニでお弁当を買って昼食をすました。次の井田川駅で今日のウォークをやめればよかったのだ。しかし、無人駅のベンチで休憩して水を飲んでいたら、次の電車は1時間後という。ならば次の亀山まで歩いてしまうのではないか、と強気の虫が頭をもたげ、ついに歩くことになった。歩きだしてすぐ、両足に筋肉痛が始まった。だんだん休む回数も増える。もう歩けないという弱音も出る。最後は私もサンチョも足を引きずりながら、約1時間半かけて亀山駅へ到着した。



これまで私たちと一緒に東海道ウォークをしてきた「東海道中膝栗毛」も、この追分（分かれ道）で、左へ折れて、伊勢街道へ入って行った。我々は右へ行くので、この先は弥次さんと北さんの案内がない旅になる。昔からこの辺りでは東海道に行く人よりも、お伊勢さんへ向かった旅人の方が多かったようで、その代表的な事例に「ええじゃないか」騒動がある。

四日市宿と次の石薬師宿の間に日永の追分がある。追分とは道が分かれるところの意味で、ここでは道標に「左いせ参宮道」、「右東海道」とある。左が伊勢街道、右が東海道の分岐点である。今の追分にはその道標と常夜灯、清めの手水所がある。

元禄以降「おかげ参り」が盛んに行われた。奉公先から抜け出した奉公人が、伊勢参りへ出かけた現象を指している。おかげ参りは場所によっては「お札詣り」とも呼ばれた。彼らは貧しかったので、乞食同様の身なりで、船や駕籠へ乗ることもできずに歩いた。その多くの人々がこの「日永の追分」から伊勢へ向かっていったと思われる。

慶応3年頃から明治維新にかけて、天からお札が降ってきた、これは慶事の前触れだといって、民衆が仮装して「ええじゃないか」を連呼して熱狂的に踊っ

た「ええじゃないか」と呼ばれた現象があった。これは徳川幕府が崩壊すると急速に収束してしまったので作為性があるものの、これもまた「おかげ参り」の一種ではないかといわれている。

49 亀山	シャープ亀山工場	2011 年 10 月 1 日
-------	----------	-----------------



シャープ亀山工場は 2004 年頃、吉永小百合さんが紹介するTV用大型液晶パネル生産工場がある街というCMで全国区になったブランドである。その後間もなく、その

CMIはもちろんだが、亀山の名前もほとんど聞くことがなかった。しかし、2009 年突然、亀山工場の液晶パネル生産を中止し、その生産設備を中国に売却するらしいというわさが市場に流れた。

今はうわさ通りに第一工場から液晶パネル生産設備は全部撤去（中国へ搬出）されて、空である。隣接する第二工場では3月の東日本大震災の影響を受けたとして操業を休止していたが、5月から中小用液晶パネル生産を再開している。

世の経済評論家は液晶パネルは成長期を終えて、構造改革が必要な時代になった、というが、たった7年前、鳴り物入りで誘致した液晶工場が、市場規模縮小で早々と撤退の憂き目に遭遇しているのである。ということなのか。企業論理の身勝手さがこれほど露骨に表れた事例を私たちはこれまで経験したことがなかった。



シャープ亀山工場模型（茶色は第一工場、白色が第二工場。シャープHPから借用）

シャープ亀山工場は、デジタルハイビジョンテレビ時代を迎えて、世界初の液晶テレビ一貫生産工場として企画された。そこで作られたTVは「カメラモデル」と名付けられて、売りに出された。この工場は2002年に企画され、2004年に開業した。当時この工場は、二つの点で話題になった。

第一に、三重県 90 億円、亀山市 45 億円、計 135 億円の大型補助金支出の件。三重県は大型補助金で企業誘致を進める風潮を作りだした。実際にも、その後、尼崎市、堺市、神奈川県、横浜市などでも大型補助金で企業誘致を始めた。自治体による大企業誘致は、02 年の工場等制限法廃止、06 年工場再配置法廃止で工場の流動性が高まり、どこでも工場誘致ができるようになって、財政基盤確保、地域雇用確保、都市間競争で自治体になりふり構わない誘致競争に走った背景がある。これは日本経済自体が低成長で沈滞する中、自治体の経済政策が産業集積の経済効果を再認識し、外部活力の導入に軸足を移した結果だった。

第二に、三重県の場合、三重大学と一緒にあって液晶産業（フラットパネルディスプレイ産業というらしい）を中心に世界規模の産業集積を図るという「クリスタルバレー構想」をぶち上げた。この構想は今となっては全くの絵空事になってしまったが、補助金支出を正当化するために、地域の学者やコンサルを巻き込んで、米国のシリコンバレーのパクリのような構想を作り上げたのだ。産業振興や街の活性化対策で決め手を欠く行政が、学者や研究者、調査機関を使って事業を尤もらしくし正当化する手法は国を始めどこでもよく使う手だろう。それがたった 6 年で化けの皮がはがれる程度ものだったということだ。

前北川知事が大風呂敷を広げたほどの雇用もなかった。工場周辺ではコンビニがあるのでもなく、まだ新しいアパートが目につく。今、第一工場跡に米アップル社がスマホ向け液晶製造ラインを新設する話が進んでいる。それもまた、住民はもちろん、市や県もほとんど知らないまま進んでいる話に違いない。

桁はずれの補助金や税の減免で厚遇したもののたった 6 年で撤退した「シャープ亀山ショック」は、一人亀山の問題ではなく、日本中から製造業が東南アジアへ流出するかもしれないという話がかかなり現実味を帯びてきている今日では、どこの県、都市でも起こりうる話だという緊張感を持って、その実態の解明と適切な対策立案に早急に取り組むべき時だろう。特に特定産業や単一企業に依存している町では、地震、津波の危機管理と同レベルの緊急事と思われる。

50 関	時間が止まったまま往時の姿を保つ関宿	2011 年 10 月 8 日
------	--------------------	-----------------

10 月のシルバーウィークである。2 泊 3 日で、亀山宿から水口宿までを歩く予定。今回のハイライトは鈴鹿峠越えである。交通混雑が激しい予想なので、電車で行く。新横浜を朝 6 時にスタートして 9 時過ぎに関宿へ到着した。鈴鹿峠越えを最優先したいので、亀山～関は後にした。電車はすいているが、関西本線というのに単線だから、行く先々の駅ですれ違いのために時間調整をする。だからよけい時間がかかる。まあ連休だし、昔の道を歩く旅だから、それもまたよしとするか。



関の「西の追分」で、道は鈴鹿峠を越えて京都へ向かう東海道（国道 1 号線）と加太峠（かぶと）を超えて奈良へ向かう大和街道（国道 25 号線）に分かれる。150 年前の話だが、大和街道はイギリス初代公使ラザフォード・オールコックが奈良から加太峠を越えて歩いた道である。東海道はその 5 年後にイギリス公使館通訳アーネスト・サトウが画家ワグマンと連れ立って草津から鈴鹿峠を越えて歩いてきた道である。オールコックもサトウもこの関宿を通して江戸へ向

かったのだが、私まで 150 年前にタイムスリップして、今にも彼らが向こうから歩いてやってくるような気分になる。関宿では旧道にそって両側の家々が昔の造りで復活している。しかもその古い造りの家々が東海道に沿って相当長い区間にわたって連担している。歩き出すと初めはまあ昔懐かしい街並みと思うが、そのまま歩き続けると次第にあたかも街が往時の姿を保ったまま、時間が止まっていて、自分がタイムスリップしているような不思議な気分になってくる。

時間が止まった原因は、東海道本線も新幹線も岐阜を通過して、三重を通らなかったために、人々がこちらへ来なくなって、昔の賑わいを一気に失ってしまったためではないかと思われる。東海道本線の場合、明治中期頃すでに開通していた神戸～大津間と長浜～大府間の既存区間を利用して建設費を安くさせようとして岐阜側に敷設された。また新幹線の場合も、鈴鹿山脈を越えるトンネルの工期が長く工事費用が高いのを避けるために岐阜側に作られたらしい。

いずれにせよ、名古屋を出発した関西本線が単線で、四日市を過ぎると列車本数もまばらになり、亀山から先では架線もなくなりディーゼル列車に変わっていく様子を見てみると、街々もだんだん時代から取り残されているように見える。関宿では街が本当に江戸時代の姿を保っていて、ここでは時間が止まっているかのように思われる。



51 鈴鹿峠	鈴鹿峠	2011 年 10 月 8 日
--------	-----	-----------------

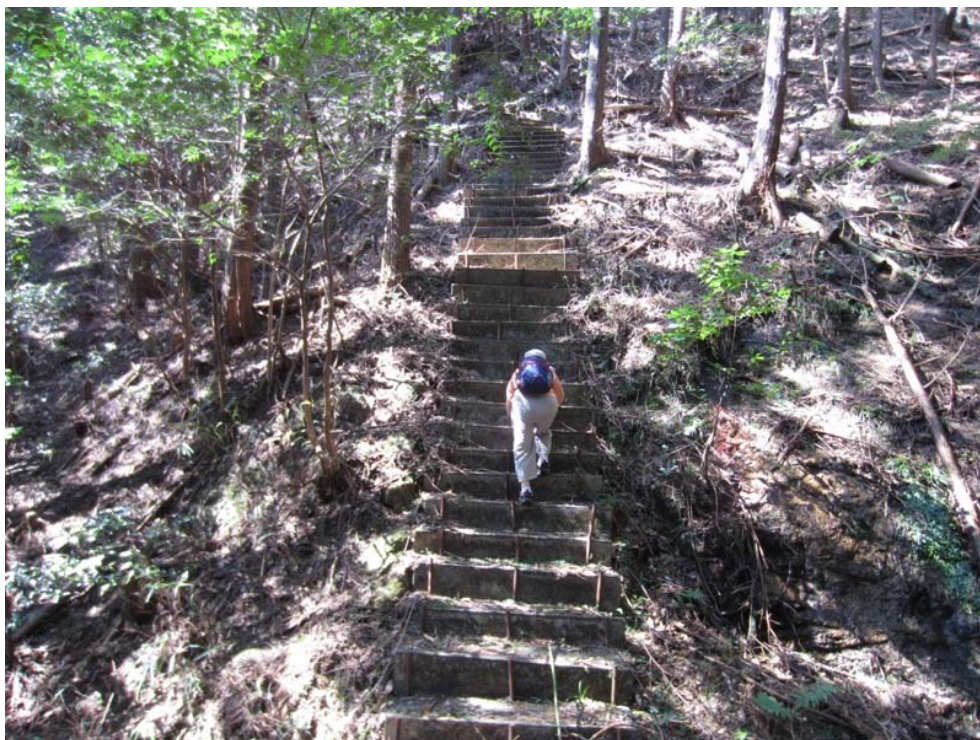
快晴である。日向を歩くとまだ暑い、木陰へ入れば爽やかな風があってスーッと汗がひいていく。絶好のウォーキング日和である。東海道ウォークの最後の難関の鈴鹿峠越えである。



万人講常夜燈(鈴鹿トンネル上)

関宿を出て坂下宿までの間、国道一号線の歩道が旧東海道になる。今回の東海道ウォークで、何が嫌かっていうと、この一号線の歩道を歩く時が最悪だ。トラック、海コン、ダンプカーなどの重量級の車が激しく行き交って、騒音、排ガスがひどく、また日よけになる街路樹などもない。だから、東海道が一号線と別れて歩けるところへ来るとホッとします。それでも鈴鹿峠へとりつくと、通過する交通量がグンと減少するので、排ガスや騒音は少し和らいでくる。

坂下を過ぎるとすぐ、「東海遊歩道」と名付けられた山道があって、東海道から右へ入る。入るとすぐもの凄い階段道になり、両手ではいつくばるようにして上る。山道は登ったり下がったりするが、山自体は下まで太陽光が差し込んで相当明るい。



先日の大型の雨台風の影響で、あちこちになげ崩れや倒木が流された跡が残っている。サンチョがやがて音を上げる。急過ぎる、しんどい、急な崖のく山道が怖いなどだ。それでもだましだまし、やっとの思いで片山神社を過ぎる。そこから数か所を曲がると、突然平らな所へ出る。そこが鈴鹿峠頂上だった。



52 土山	たる みさいおうとんぐうあと 垂水斎王頓宮跡	2011 年 10 月 8 日
-------	---------------------------	-----------------

鈴鹿峠を越えて滋賀県へ入った。滋賀と言えば「近江」で、白洲正子女史がこよなく愛した街である。昭和 30 年代後半の「西国巡礼」の取材以降、彼女は近江の魅力にはまって歩き回り、「白洲ワールド」と呼べるような近江像を作り上げた。

それからほぼ半世紀が過ぎるが、私も今回の東海道ウォークのエンディングで、滋賀に来たわけで、もう最初の宿場の土山へ来ただけで、あの白洲ワールドの一端を垣間見ることになった。



土山宿には「^{たる みさいおうとんぐうあと}垂水斎王頓宮跡」がある。平安朝の時に天皇が即位すると斎王に選ばれた皇女が、数百人のお供を連れて伊勢神宮へ参拝する習わしがあり、その一行がここで禊ぎのために仮宿泊した場所である。

伊勢へ向かう道はほかにもあるのに、特に野洲川沿いの道が選ばれたのは、日雲（三雲）との関係によるとしか思えない、と白州は述べている。（「鈴鹿の流れ星」（「近江抄」）所収）。

今の頓宮跡は茶畑の奥にあって、井戸と小さな祠と石碑が残っているだけである。この頓宮跡の前を走る東海道が、江戸時代のはるか以前から鈴鹿峠越えをして伊勢へ向かう斎王行群に使われていた。その同じ道が、次には江戸へ向かす大名行列に使われて、大勢の人々がここを歩いていたと想像することはなんと楽しいことか。

53 土山	田村神社	2011 年 10 月 8 日
-------	------	-----------------

「白洲ワールド」について、もう少し補足する。

白洲正子女史は、高貴な生まれの何物にも囚われない自由人で、自身の感性で選んだ上質な物に囲まれて育った人である。その「白洲ワールド」の楽しみの一つは、本人は「日本文化の裏方」などと言うがそんな格好イイものでなくて、「滅びゆくものへの切ない哀惜の情」とも言える女性らしい感性がいつも漂っている点にある。

たとえば伝統技術で、今を盛りに活躍する人々でなく、印伝、土鍋、扇、箸の職人らを取り上げる。これからもメジャーになれず、放っておいたらその技術はもちろん、それが支える日本文化の一部までもが失われてしまいそうな所で活躍する人々を取り上げる。その姿勢は、紀行でも同様で、人里離れた山奥や街道沿いの神社でもなく、街道から少し奥まったところにあって、時代からも取り残されて寂れた寺社を積極的に取り上げようとする。



田村神社

さて、田村神社である。

「今昔物語」には鈴鹿山には盗賊団の巢窟があつて、伊勢へ往復する商人たちを襲った。山上には今でもあるが「鏡岩」という巨岩があつて、盗賊たちは、その石を磨き鏡にして往来の人々を偵察したという。そこへ、室町時代の桓武天皇の頃だが、田村麻呂が征夷大將軍に任じられ、身の丈5尺8寸の巨体を使って、鈴鹿山の鬼を退治した、と紹介されている。

坂上田村麻呂という人は、巨軀で、怒れば猛獣も倒れ、笑えば赤子もなつたと言われて、大将の器にふさわしい人物だったらしい。後に清水寺も創立するような信仰心の篤い人だった、ともいう。

白洲はこの田村麻呂について、謡曲の「田村」にも登場して英雄話と観音話が入り混じるところもあるが、人々が長い間この人のことを忘れずにいて、伝説になって行った過程に感心している。そして、田村神社は、倭姫と坂上田村麻呂を祀っているが、倭姫は別名を鈴鹿姫というくらいにこの地方と縁が深い女性だったが、田村麻呂は鈴鹿山の鬼退治の武勲により後から付加されたらしい、と「鈴鹿の流れ星」で紹介している。



54 水口	水口の干びょう	2011 年 10 月 9 日
-------	---------	-----------------

土山から下って水口宿へ入ると、東海道は3ルートに分かれる。街の一部区間だけのことだが、どの道を行っても水口石橋へ出る。ここが街の中心だったが、今はすっかり寂れている。この水口は江戸時代には干びょうの産地で、歌川広重の53次の絵にも水口の干びょうとして登場している。今ではその生産は激減し、水口でその干びょうを見たくても、簡単には見られなくなっている。



日本経済史では、明治以降、江戸時代の特権的商人たちが西洋の高度な産業機械を輸入して「近代的」資本家に転化して資本主義を発達させたといわれている。その時に資本主義生産のための労働者はどこからやってきたか、が大きな問題だった。

その答えは現在では次のように考えられている。

江戸時代に各地で農村工業が発達して商品経済が発展した。色々な生産部門が各地で発達し、これらが組合わされて自給自足を目指す局地的経済圏も形成された。資本主義の本家・イギリスの場合には、これらの局地的経済圏がさらにいくつか集まって融合してついに一つの国民経済を形成していった。しかし、日本の場合、幕末期に開国で外国貿易が始まると、各地の局地的経済圏が次々壊されていった。江戸期の特権的商人が輸入した西洋機械で工場を整備し、局地的経済圏が生み出した成果を次々と利用していったからである。その最大のものが労働者の利用だった。

日本でも江戸時代にはすでに農村工業が各地で発展し、明治維新以降の急速な資本主義化は、そうした「ゆりかご」があったからこそ可能だったといわれている。名古屋の近郊や瀬戸内沿岸の地域ではいくつかの事例がみられる。

今回の東海道ウォークで、私たちは二つの局地的経済圏の例に出会った。一つ目が名古屋の有松、二つ目がここ滋賀の水口である。有松では、綿や絹から加工された手拭いを絞り染めして販売していた。水口では農産物の夕顔から干びょうを加工して販売していた。その販路は東海道に乗って江戸や京都、大阪まで広がっていた。彼らは農村工業として未熟だったが、労働者を雇用して資本家的経営を営んでおり、農村ブルジョアジーと呼ぶことができる人々だった。

旅の途中なので、その経営規模まではわからないが、彼ら農村ブルジョアジーは豊かな貨幣経済を営み、彼らの上層で地主化していく人々と下級武士との境目はほとんどわからない状態にまでなっていただろう。また、彼らの中には、江戸時代では禁制だった近代を志向する精神的基盤も生まれて、尊王攘夷思想に向かって走り出した若者たちもいただろうと思われる。

55 水口	しがらきぐう 紫香樂宮	2011 年 10 月 21 日
-------	----------------	------------------

三雲(みくも)は昔から交通の要衝だった。水口(みなくち)から来た東海道は「横田の渡し」で野洲川(やすかわ)を渡って三雲へ入り、そこから石部宿へ向かう。貴生川方面へ行けば竜法師(りゅうぼし)や油日(あぶらひ)、甲賀へ向かう。南へ下れば信楽や紫香樂宮跡へ向かう。三雲と石部の間には「美し松」の原生林があり、幹の途中で枝分かれする珍しい赤松林がある。

その山の南に広がる山々が金勝山(こんぜやま)である。金勝山という山は実際にはなくて、鶏冠山(けいかんざん)、竜王山(りゅうおうさん)、飯道山(はんどうさん)、阿星山(あぼしやま)などの連峰を指す名称である。

紫香樂宮はこの金勝山の南麓にある。赤松と土が信楽焼きの舞台になって、紫香樂宮の宮殿の屋根瓦が作られた。また、赤松を燃料にして金勝山に住む「金勝族(こんぜぞく)」の人々が紫香樂宮の大仏建立を決定させたように思われる。





紫香楽宮跡は貴生川と信楽を結ぶ信楽線の「紫香楽宮跡駅」が最寄駅である。飯道山、阿星山、竜王山に囲まれた高台で、松林の中に礎石が整然と並んでいる。

紫香樂宮は、奈良時代中期、聖武天皇が5年間に4回遷都し、その3番目に築かれた都で、三年間続いた。聖武天皇は、740年に都だった平城京を離れて、恭仁宮（くにのみや、木津川市）建設を開始。その2年後の742年に紫香樂宮（しがらきのみや）造営も開始したので、国家財政がひっ迫し、743年に恭仁宮建設を中止した。翌年、焼失して再建中だった難波宮を都にすると宣言するが、その直前に天皇は紫香樂宮へ移っていたため、745年に紫香樂宮が都になった。しかし、その後世上不安が相次ぎ、4月後には再度平城京へ戻ってしまった。



聖武天皇の側近には唐から帰った留学生や帰化人が多くいて、遷都は唐の玄宗皇帝の三都制に倣ったと考えられている。太原、長安、洛陽を三都とし、洛陽の郊外には龍門石窟があり、巨大な大仏が置かれた。これに倣って聖武天皇は紫香樂に大仏を建立しようとした。そして、飛鳥へ遷都した際には、すでに工事中の大仏像の骨柱も持ち帰り、その後奈良の大仏として完成されたという。

白洲女史は、天皇の知恵袋だった良弁（ろうべん）らが、「唐の三都制」を天皇に教え込んだとともに、金勝山を根城にしていた「金勝族こんぜぞく」という金属加工技術を持つ集団を引き連れて大仏建立に着手したと説明している。こうしてみると、紫香樂宮は、東大寺の前身で、ここでの大仏建立が奈良の大仏の前身になっている。わずか三年で消滅した紫香樂宮はそのまま放置されて、今では松林の中で礎石が残るにすぎない。

56 石部	みかみやま 三上山	2011 年 10 月 21 日
-------	--------------	------------------

今日から2泊3日で石部宿から大津宿まで歩く。今回は車である。朝3時過ぎに出発し、3時半過ぎに横浜ICで東名高速に乗った。朝が早い理由は、平日に午前4時までに高速に入ると半額になるサービスを利用するためだ。朝早いため、サンチヨは前夜の間に、洗濯と掃除を済ませ、その上に「おむすび」まで作ってくれた。だから朝2時半頃起こすと、寝ぼけていた。

夜が明けない高速道路はすこぶる順調に走ったが、岡崎あたりで大渋滞につかまった。原因はちょうど今日の夜に終了予定の集中工事のせいだった。なんせ3車線のところを2車線つぶして工事をしているので、車は一車線へ集中して渋滞を起こしているのだ。朝9時には土山ICへ到着予定だったのに、着いたのは11時になってしまった。おむすびがあったので朝ごはんは問題なかったが、渋滞で困ったのはトイレだった。二人とも小をもよおしてきたが、どうしようもない。我慢するだけだった。

三雲から東海道は野洲川(やすかわ)につかず離れずしながら草津へ向かう。石部宿を過ぎると、右前方になだらかな稜線を描く美しい山が大きく見えるようになる。三上山である。



わずか 432m の低い山だが、近江八幡から草津の間は高い山がないので、別名「近江富士」の名前を持つ三上山は群を抜いて美しい。その足元を野洲川（やすかわ）が広い河川敷の中をゆったりと流れているのもいい。形の良さと琵琶湖の対岸からもよく見えることから関西一円によく知られた山になっている。

「三上」は「御神」とも書く。この山を7巻半した「大ムカデ」を武将の俵藤太が弓で退治したという伝説がある。昔、「瀬田の唐橋」に住む竜神が夜ごと現われる三上山の大ムカデに悩まされて、誰かに退治してもらおうと大蛇に化けて橋に横たわっていた。そこへ弓の名手・藤原秀郷が通りかかった。竜神から助けを求められた秀郷は承知し、早速、深夜雷鳴をとどろかしてやってきた大ムカデと対決した。第一の矢ははじかれてしまった。しかし、ムカデは唾に弱いことを思い出して、第二の矢には唾をつけて目を狙って矢を放つと突き刺さり、怪物は倒れた。喜んだ竜神は、秀郷に食べても食べても減らない米俵や釣鐘などの宝物を差し上げた。この米俵から俵藤太秀郷と呼ばれるようになったという。



57 草津	天井川(旧草津川)	2011 年 10 月 22 日
-------	-----------	------------------

今日は草津から大津まで歩く。前夜は音を立てて雨が降っていたが、今は薄曇り状態で、天気予報では午後 3 時以降に雨が降るかも、という。ならば雨が降る前に歩こうというので、朝 8 時半からスタートし午後 2 時ころ到着予定とした。

道は平坦である。一号線でなく旧街道を歩くので、車もさほど多くなく、歩きやすい。これまでの道中では、こうした旧街道になると、お店が全くなくて、ひどいところでは水の自販機すらないところもあった。家々はあるので、そこに住む方々がいかに不便な日常生活をされているかと心配にもなるほどだ。今日の草津ではその心配はなかった。久しぶりだが道沿いに和菓子屋さんもあるし、時々コンビニもあった。

東海道は旧草津川に沿っているが、ここ草津追分で左(南方向)へ直角に曲がって大津へ向かうことになる。その追分の角に石標があって、「右東海道いせ道」「左中山道」とある。中山道と言えば、日本橋から出て、信濃、木曾を経て、ここ草津で合流して京都へ至る五街道の一つだ。そうか、ここから一号線と八号線は一つの路線になって京都へ行くんだ。今日大津へ着けば、あと一日で京都到着ということになる。我々の東海道ウオークもいよいよあと少しになってきた。





私は会社でウォーキングの話をよくしてきたが、私がウォーキング熱中症候群にかかっているので、ウォーキングが終わると病気になる恐れがある。だから次をどうするか早く決めなさいという口悪い連中がいる。そこで私は、つぎにやることは、「日本釣の旅」か「アメリカ大陸横断」のいずれかをやるんだと宣言している。ほかの街道を歩くなんて、最早考えてもいない。次は日本脱出だ。

ところで、上の写真の奥に写っているのが旧草津川である。この川は洪水のたびに土砂が流れ込んで川床の高さが上がって堤防の嵩上げが繰り返されて、天井川になった。明治22年東海道本線は、草津川の川底にトンネルを掘って開通させたという。その後台風のとど堤防が決壊して市街地に洪水被害を及ぼしたため、S46年から放水路が計画され、H14年に新草津川へ付け替えられて、旧草津川は廃川になった。しかし旧草津川は江戸時代から珍しい天井川でその堤防もまた桜並木の名所として親しまれてきたので、草津市ではこれを保存しようとしていると聞いた。

58 大津	瀬田の唐橋	2011 年 10 月 22 日
-------	-------	------------------

「瀬田の唐橋」へ来た。

琵琶湖から出る川は瀬田川しかなく、瀬田川はやがて淀川と名前を変えて大阪へ流れ込む。昔から瀬田川にかかる唯一の橋だった「瀬田の唐橋」は、京都防衛上の拠点で、「唐橋を制する者は天下を制する」と言われて、何度も焼かれたり壊された歴史を持つ。またこの橋は単に政治上の歴史の舞台になっただけでなく、文化面でも「近江八景」の一つとして、文人や風流人に大事にされてきた。



今の唐橋は一号線の下流にあり、1979年に架け替えられたクリーム色の鉄筋コンクリート橋である。近年その塗装も痛んだので、2009年に塗り替え話が起きた。管理者の滋賀県は同じクリーム色で塗ろうと考えたが、地元から「待った」がかかった。観光協会をはじめとする人々から朱色がいい、茶色がいい、白色がいい、などと提案が出されたのだ。それとともに地元では、「唐橋と景観を考える協議会」を発足させて、商店会や自治会などと議論を始めた。これを見

て、県では工事を延期して「景観検討委員会」を設けた。この三つ巴の論争は、2011年1月の景観検討委員会で結局、中間をとって「茶色」で決着したという。11月着工予定ということで、今日はまだ工事は始まっていなかったが、こうした論争は仕掛ける側もそうだが、最後は何色に決まってもいい。その過程で多くの人々が参加して意見を出し合って、ふるさとづくりの意識を高めるチャンスにできればいいのだ。私のこのブログの表題も「多事争論」というのだが、これは福沢諭吉「文明論之概略」から頂いた言葉で、要するに多事多端を特色とする近代社会ではさまざまな議論こそが社会発展の原動力で、多事争論を経て意見も次第に集約できるのだからこれを大事にしよう、というものだ。

それにしても、出てきた意見を見せてもらおうと、コンクリ橋でなく木橋化、高欄くらいは木造化、朱色は安っぽい、暗闇で浮かび上がる白色がいいなど、「議論の本位」を越えた議論が飛び交ったらしい。それでもいいではないか。どんな橋にしたらみんなに喜んでもらえるかと自由闊達行われた議論はきっと楽しかったに違いない。



59 大津	大津京	2011 年 10 月 22 日
-------	-----	------------------

大津京は今、錦織遺跡(にしきこおり)と崇福寺遺跡(すうふくじ)があるにすぎない。京阪電車の近江神宮駅を降りてすぐ近くに錦織遺跡はある。「それはもう廃墟ですらなく、大宮の跡にしてはみすぼらしい礎石にたまった水が、雲の影を映すだけだ」と白洲正子というが、そんな情緒は少しも感じさせない今風の住宅地の一角に小公園のようなたたずまいで残されている。大津京とは、668 年天智天皇(中大兄皇子、なかのおおえのおうじ)が飛鳥から大津へ都を移してから、673 年に「壬申の乱」で勝利した天武天皇(大海女皇子、おおあまのおうじ)が飛鳥へ再び都を戻すまでの五年間の都をいう。



「壬申の乱」は672年の天智天皇没後の皇位継承争いで、実子の大友皇子（おとものおうじ）と実弟の大海人皇子（おおあまのおうじ）が戦った古代史最大の内乱である。大友軍と大海人軍が「瀬田の唐橋」を挟んだ激闘の末に唐橋を制した大海人軍が勝利し、敗れた大友皇子は北へ逃げて崇福寺（すうふくじ）の手前で自害した。

この「壬申の乱」の原因は約20年前の「大化の改新」まで遡る。745年中大兄皇子（のちの天智天皇）は藤原鎌足とともに、蘇我氏を倒して天皇による中央集権国家の建設を開始した。おもな改革は、「公地公民制」、「班田収授法」、「租庸調の税制改革」である。これを「大化の改新」というが、さらに都を飛鳥から難波宮へ移して豪族政治を終わらせた。また、「大化」という年号を初めてつけて今の天皇制による日本国の起源にもなったといわれている。なお、673年に孝徳天皇と中大兄皇子が不仲になって、都は再び飛鳥へ戻された。

さて、中大兄皇子である。彼はその後20年間にわたり皇太子として政治の中樞にあった。しかし、663年に百済を救うとして朝鮮出兵するが、「白村江の戦い（はくすきのえ）」で唐・新羅軍に大敗した。この外交の失敗で国内では新たな税負担や出兵負担に対する不平が高まった。668年に中大兄皇子が天智天皇に就任すると、都を大津京へ移し、皇位継承で従来の同母兄弟相統制を嫡子相統制へ変えて、強引に実子の大友皇子を後継者にした。そのため飛鳥の豪族の不平を買うとともに、同母弟の大海女皇子側の不平も呼び起こした。

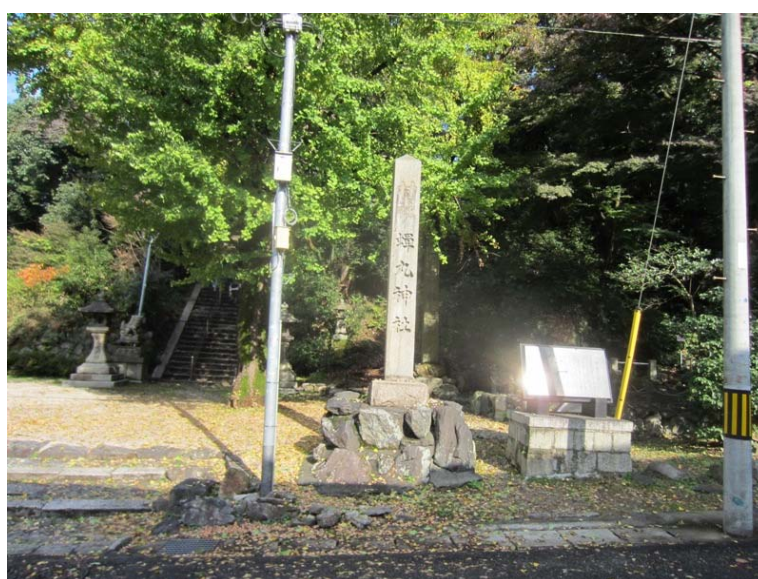
671年12月、天智天皇が崩御し大友皇子が跡を継ぐと、大海女皇子は身の危険を感じて出家して吉野へ逃れた。しかし次第に朝廷側の圧迫が激しくなり、翌672年5月大海女皇子は決戦を決意。吉野から私領地がある美濃へ移動して戦いの準備を進めた。大海女軍は不破（美濃）で東国からの数万の援軍を得て、7月に琵琶湖を回って大津京を討つ部隊と、桑名、鈴鹿を経て大和を討つ部隊に分かれて進軍を開始した。この戦いで、大海女軍は連戦連勝し、最後の決戦場が「瀬田の唐橋」だった。

白洲正子女史は、歴史家が天智天皇=悪玉、大海女皇子=善玉に単純化しすぎていることを嫌って、天智天皇=苦労人の兄、大海女皇子=兄の後ろにいたお坊ちゃん、だったという。私には天皇家の内紛のような権力者相互間の椅子の奪い合いには余り興味はないが、さほど豊かでもなかった当時、飛鳥、難波、大津とたびたび遷都を繰り返してきたことに関心があって、支配者の支持基盤が当時大きく流動化し始めたためではないだろうか、としきりに思うのである。

60 大津	逢坂の関	2011 年 11 月 20 日
-------	------	------------------

11 月 20 日(日)、大津から京都三条大橋へ向けて歩く。

大津を出て一号線の歩道を歩く。切通しを大きく右にカーブすると、右側に「逢坂の関跡」の石碑がある。少し先には「蟬丸神社」もある。「逢坂の関」は東国からくると、京の入り口にあたる関所だった。また、蟬丸神社は歌舞音曲の神様で、いずれも昔から「別れと出会い」の代表のような話がある場所だ。私たちにとっても、逢坂の関は東海道ウオークのゴールの入り口である。



蟬丸神社には、盲目の琵琶法師・蟬丸が祀られている。蟬丸の由来には各説があるが、白洲正子女史は、謡曲「蟬丸」に基づいて、醍醐天皇の第4皇子・蟬丸の宮の話として、次のように紹介している。

蟬丸は、生まれつき盲目だったため、剃髪の上逢坂山へ捨てられた。そこへ逆髪という狂人がやってくる。彼女は蟬丸の姉で、御所を抜け出して逢坂山へやってきた人である。二人の姉弟は手を取り合って身の不幸を嘆き、慰めあう。やがて名残を惜しみつつ、姉は去り、弟は見えぬ目で送る。

「これやこの 行くも帰るも分かれては 知るも知らぬも 逢坂の関」(蟬丸)

(これがまあ 旅立つ人も帰る人も、知っている同士も知らない同士も 別れてはまた会うという 逢坂の関なんだなあ)

「逢坂山」の地名は、「逢う」の言葉で数々の歌にも詠まれきて、我々の想像力をかきたてる。その一つに、「源氏物語」の「空蟬（うつせみ）」がある。花の都の玄関である「逢坂の関」に立って、花の街を縦横無尽に歩きまわった光源氏の話の一つをまくら代わりに述べることにする。



逢坂の関跡

平安時代に鈴鹿関(伊勢)、不破関(美濃)とともに三関と呼ばれた。当時、東海道、中山道、近江路、北国街道を行き来する人と物資が集中する最大の交通の要で、京の玄関口として広く知られた。しかし、646年に設置されて、約150年後の795年頃に廃止されたという。

光源氏は須磨明石から戻り、26歳で政界へ復帰する。その一年後の9月、大津の石山寺へお礼まいりに出かけたところ、たまたま常陸の国（茨城県）から京へ戻る途中の空蟬（うつせみ）一行と逢坂山の関所（関谷）ですれ違った。

空蟬は、光源氏が17歳の頃、頭の中將、佐馬の上、藤式部の丞らで「雨夜の品定め」をした次の夜、中川の伊予の守の屋敷で会った女性である。彼女こそ、品定めで話題になった「中流階級の女」で、その日強引に一夜を共にした女性だった。彼女はその家の当主・伊予の守の妻だったが、光源氏は彼女を忘れら

れず、何度か手紙をだすが、らちが明かない。ある日、主人の留守にその屋敷へ出向いた時、夜中に忍んでゆくと、気配を感じ取った彼女は小桂（こうちぎ）を一枚残して部屋からいなくなってしまう。光源氏が近づくと消えてしまうというので、跡に残された衣を持ち帰り、「空蟬（セミの抜け殻）」のようだと恋しく思った。空蟬はその後、実際にも夫の任国へ去ってしまった。

さて、逢坂の関である。源氏と空蟬は10年ぶりに再会したのだ。紅葉する山の中で昔恋しあった男女が逢って、昔を偲んで切ない思いを込めた歌を交わして、ひっそりとすれ違う。源氏がとっさに、わざわざ逢坂の関までお迎えに来ましたよ、と冗談を伝言すると、空蟬は次のように応える。

「行くと来と　せきとめがたき　涙をや　絶えぬ清水と人は見るらむ」

（私の気持ちは、流れてやまないこの関の清水のように　昔も今も光源氏にあったのに　この心を君は知らない）

その後も何度かラブレターを送るが、空蟬は応えない。そのうちにご主人もなくなり、義理の息子の下心を知ると、とうとう出家してしまう。空蟬は悩みながらも最後まで高い気品と矜持を貫いた女性だった。最後に出家した空蟬を二条東院へ迎えて、生涯その面倒を見ていく。

光源氏といえども生涯成し遂げられなかった恋が二つあった。一つ目が明石の上との恋、二つ目がこの空蟬との恋だった。この中川の女・空蟬は頑固者といえるほど、人妻の立場、下級役人の妻の立場をおもんばかって、源氏の気持ちにこたえられないと言い続けた女性である。一説に空蟬こそ作者の紫式部ではなかったか、という人もいる。モデル探しであれこれするよりも、節操を守った女性がいて、ドンファン光源氏がそうした女性に強く惹かれるという話は、今も昔も同じようで、面白いではないか。



走井(はしりい)の名水

大谷町を下ると東海道は再び一号線の歩道を歩くことになるが、その歩道のすぐ左側に「月心寺（げっしんじ）」がある。月心寺の玄関をあけると、「走井の名水」がある。いつもこんこんと清水が湧き出す名水として広く知られている。広重の「大津の錦絵」にも、あふれ出る走井の水のそばの茶店で旅人が休息する光景が描かれている。それほど歴史のあるところだが、明治以降住む人もなく荒れ果てた。大正初めに画家の橋本関雪氏がこれを見かねて、別邸として再整備し、その後月心寺になったという。私たちは行けなかったが、庭園もまた素晴らしいという。

61 京都	花咲く都	2011 年 11 月 20 日
-------	------	------------------

京都に到着。東海道を完歩した。

2009 年 8 月 9 日に日本橋を発ってから、2 年 4 月をかけて三条大橋に到着した。その間、09 年 8 月～11 年 1 月までの約 1 年 4 月にわたる「ひざ故障」による空白期間があるので、実質的には約 12 月位で歩いたことになった。

我々のウオークは、前回到着点（ほぼ駅）までマイカーか電車で行って、そこから歩く。一日歩いて最寄り駅から電車でスタート地点の駅へ戻り、電車ならそのまま、マイカーなら乗り換えて帰宅する方法をとった。だから最寄駅がない場合にとても困った。箱根宿、岡部宿、鈴鹿峠がそれだった。

今回のウオークで辛かったのは夏の暑さだったが、今振り返ってみれば、その辛かったことは大した問題でなく、むしろ次のことに気付いた方が大きい成果だった。

歩くということは、見るということ。

見るということは、考えるということ。

考えるということは、発見すること。

振り返れば 2 年 4 月前に日本橋をスタートした時、車や電車ではなく東海道を自分で歩いてみよう、そしたら、今まで見過ごしてきたことも再発見するかもしれない、と心ひそかに思っていた。その東海道ウオークは、実際には発見の連続だった。発見は驚きである。このブログにそのいくつかを紹介したこともある。こうした驚きは私たちの心を豊かにさせてくれる。だから今回のウオークはいつも心地よく楽しかった。

京都入りが今日になったのは、花咲く都へ入りたかったためである。紅葉に彩られた花の都をゆっくり見てみたいと考えたのである。たくさんの紅葉を見てきたのでそのいくつかを紹介する。



三条大橋



天龍寺(嵯峨野)



石山寺(大津)



三井寺の晩鐘(大津)



加茂川



三千院(大原)



三千院(大原)



寂光院(大原)



寂光院(大原)

62 京都	行程表	2011 年 11 月 25 日
-------	-----	------------------

東海道ウオークが終ったので、ドン・キホーテとサンチョパンサはしばらく普通の生活に戻ります。(下の写真は、かつてマドリッドで出会った我々の先輩です)



東海道ウオーク	行程表
---------	-----

東海道 53 次

行程

日本橋	日本橋駅	09 年 8/9	7km
7 k m			
品川	青物横丁駅	09 年 8/16	12 km
12 km			
川崎	川崎駅		
9 km			
神奈川		11 年 1/9	14 km
5 km			
保土ヶ谷	保土ヶ谷駅	1/10	9 km
9 km			
戸塚	戸塚駅		
8 km			
藤沢		1/15	17 km
13 km	茅ヶ崎駅		
平塚		2/6	14 km
4 km			
大磯			
17 km	二宮駅		
小田原		2/11	21 km
16 km	箱根湯本駅		
箱根		2/19	12 km
	芦ノ湖		
15 km		2/27	16 km
三島	三島駅		
5 km			
沼津		3/5	12 km
8 km			
原	原駅	4/3	14 km
9 km			
吉原			
14 km	富士駅		

東海道 53 次

行程

吉原	富士駅		
・ ・ ・ ・ ・			
蒲原	由比駅	4/9	14 km
6 km			
由比	由比駅		
・ ・ ・ ・ ・			
興津	清水駅	4/17	12 km
5 km			
江尻 (清水)	清水駅		
・ ・ ・ ・ ・			
12 km	清水駅	4/24	12 km
府中 (静岡)	静岡駅		
・ ・ ・ ・ ・			
4 km			
丸子	岡部バス停	4/29	12 km
10 km			
岡部	岡部バス停		
・ ・ ・ ・ ・			
9 km			
藤枝	島田駅	5/1	17 km
8 km			
島田	島田駅		
・ ・ ・ ・ ・			
6 km	島田駅	5/6	6 km
金谷	金谷駅		
・ ・ ・ ・ ・			
6 km			
日坂	掛川駅	5/3	16 km
8 km			
掛川	掛川駅		
・ ・ ・ ・ ・			
10 km	掛川駅	5/6	9 km
袋井	袋井駅		
・ ・ ・ ・ ・			
9 km			
見附 (磐田)	浜松駅	5/14	19 km
12 km			
浜松	浜松駅		
・ ・ ・ ・ ・			
12 km	浜松駅	5/15	12 km
舞阪	弁天島		
・ ・ ・ ・ ・			
今切れの渡し			

東海道 53 次

行程

新居	・	新居駅		
8 km				
白須賀			6/4	16 km
8 km				
二川（ふたがわ）	・	二川駅		
7 km				
吉田（豊橋）			6/11	12 km
12 km	・	伊奈駅		
御油			6/25	14 km
2 km				
赤坂				
10 km	・	本宿駅		
藤川			6/26	11 km
10 km				
岡崎	・	東岡崎駅		
12 km			7/2	6 km
・	・	新安城		
知立（ちりゅう）			7/3	12km
12 km				
・	・	富士松		
鳴海			7/9	12km
・	・	笠寺駅		
8 km			7/10	6km
宮	・	宮		
7 里の渡し				

東海道 53 次

行程

桑名	桑名駅	9/30	13km
16 km			
四日市	四日市駅		
11 km			
石薬師		10/1	22km
4 km			
庄野			
6 km			
亀山	亀山駅	10/10	6km
6 km			
関	関駅		
7 km			
坂下			
鈴鹿峠		10/8	17km
10 km			
土山	土山		
11 km		10/9	21km
水口			
14 km	甲賀駅		
石部		10/21	16km
10 km			
草津	草津駅	10/22	15km
15 km			
大津	大津駅		
10 km		11/19	12km
京都	京都駅		